5

日本
国語
大辞典

かつまーきにん

日本國語大辭典

第五巻

編集　日本大辞典刊行会
発行　小学館

日本国語大辞典　第五巻

昭和四十八年　九月　一日　第一版第一刷発行
昭和五十五年　七月　一日　第一版第六刷発行

©

編集　日本大辞典刊行会

発行者　相賀徹夫

印刷者　小林清

発行所　株式会社　小学館

東京都千代田区一ツ橋二-三-一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八-二〇〇

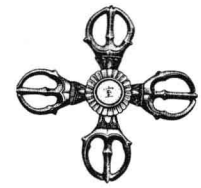
造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

かつ-ま【勝間】〔名〕「かたま(堅間)」に同じ。

かつま【羯磨】〔名〕(梵 karma の音訳) 仏語。①(天台宗、浄土宗などでは「かつま」、律宗、真言宗などでは「こんま」という。)業、作業、所作などと訳す) 広義には儀式、作法のこと。通常は戒律上の受戒(じゅかい)、懺悔(さんげ)、結界(けっかい)などの折の作法をいい、密教では如来のはたらき、諸尊の威儀などの意に用いる。*醍醐寺本元興寺伽藍縁起并流記資財帳-天平一九年「又半月々々為白二羯磨一」 ②「かつまこんごう(羯磨金剛)」の略。*参天台五台山記-四「独胡五枚・羯磨四枚・輪一枚・橛八枚」 *異制庭訓往来「火舎・輪宝・羯磨・橛及錫杖・如意」 古辞書色葉・易林・書言

かつま-こんごう:コンガウ【羯磨金剛】〔名〕仏具の一つ。密教修法具。三鈷杵(さんこしょ)を十字に組み合わせたもの。仏に本来備わっている智慧(ちえ)のはたらきを象徴する金剛杵の一種。多くは銅でつくる。羯磨。*寂照堂谷響集-六「羯磨金剛者。横二竪一立三股杵一。是故号二十字金剛一。謂執二三股の金一」 *大日経疏-一六「其作法者。先作四方漫荼羅。其界唯用羯磨金剛智印」


羯磨金剛〈奈良県 室生寺蔵〉

かつまこんごう-もくろく カツマコンガウ:【羯磨金剛目録】伝教大師最澄の書跡。延暦二四年(八〇五)七月唐から帰国の際持ち帰った品を比叡山に納めた時の自筆の目録。首部が欠失し、書き出しに羯磨金剛とあるところから、この名がある。国宝。延暦寺蔵。

かつまた【勝又】姓氏の一つ。発音〈標〉ア

かつ-また【且又】〔接続〕(接続詞「かつ」に副詞「また」の付いてできた語) 先行の事柄に後行の事柄が添加されることを示す。その上に。さらにまた。*大鏡-六・道長下「もしまことに聞こしめし果てまほしくば駄一疋をたまはせよ。はひ乗りて参り侍らん。且又御宿に参りて、殿の御才学のほども承はらまほしう思たまふるやうは」 *雑俳・柳多留-二九「且又は地下人のするうたまくら」 *和英語林集成(初版)「Katsu-mata カツマタ 且又」 *細君-坪内逍遙-三「当世の紳士に連添ふものは、誰れかさる筋を細君の義務と観じ、浮世の習ひと諦めざらんや。且つ又、夫は外出好きにて」 発音〈標〉ア(カ)マ 今史-室町○●●○と○●○○両様 余ア(カ)マ 古辞書書言

かつまた-の-いけ【勝間田池】奈良市西ノ京町の、薬師寺の北にあった池とも、また、薬師寺南西の七条大池のこととも伝われる。*万葉-一六・三八三五「勝間田之池(かつまたのいけ)は我れ知る蓮(はちす)無し然(しか)言ふ君が鬢(ひげ)無き如し-新田部親王婦人〉 *枕-三八・池は「池はかつまたの池。磐余(いはれ)の池」

かつま-もめん【勝間木綿】〔名〕「こつまもめん(勝間木綿)」に同じ。

かつまる〔名〕「がじゅまる」に同じ。*南島志-下「楡俗曰加津末留」 *和訓栞後編「かつまる 近世渡来の木也。つば木に似たり。琉語なるべし。花も椿のごとく白し。南島志に楡也といへり、心得がたし」

かつみ〔名〕植物「まこも(真菰)」の古名。*金葉-秋・二〇六「蘆根はひかつみも茂き沼水にわりなく宿る夜半の月かな〈藤原忠通〉」 *東関紀行-京より武佐「洲崎、所々に入りちがひて、あし、かつみなど生ひわたれる中に」 *俳諧・奥の細道-あさか山「檜皮(ひはだ)の宿を離れてあさか山有。路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比(ころ)もやや近うなれば、いづれの草を花がつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更(さらに)知人(しるひと)なし。沼を尋、人にとひ、かつみかつみと尋ありきて」 語源説(1)カテミ(糧実)の転〔古今要覧稿・大言海〕。(2)カタアミ(堅編)の義のカタミの転〔頑鼠漫筆〕。 発音〈全〉ガツギ(秋田) 古辞書書言

かつみ-ぐさ〔名〕植物「まこも(真菰)」の古名。《季・夏》 *虎明本狂言・鳴子「あさかのぬまにはかつみ草、しのぶの里にはもじずり石」 *日葡辞書「Catçumigusa(カツミグサ)〈訳〉淡水に生える草の一種」 *譬喩尽-二「且見卯(カツみぐさ) 真菰を云 筐卯(かたみぐさ) 同上」 発音カツミグサ〈標〉ニ

かつ-みょう クヮッミャウ【活命】〔名〕「かつめい(活命)」に同じ。*正法眼蔵随聞記-三・一三「明日明年の活命を思うて仏法を学せんは」 *日蓮遺文-四恩鈔「無智無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨られて、活命のはかりごとならん」

かつ-みょう:ミャウ【渇命】〔名〕「かつめい(渇命)」に同じ。*天理本狂言・塗師「あの人に計、あつらよふず、そちのかつみゃうはあるまひと云」 *運歩色葉「渇命 カツミャウ」 *浮世草子・日本永代蔵-二・五「諸事を兼々たくはへ置し故に渇命(カツミャウ)に及ばざりき」

かつ-みん【黠民】〔名〕ずるがしこい人。悪知恵のはたらく人。黠奴(かつど)。*新聞雑誌-五一号-明治五年六月「其間好吏随て私曲を逞(たくましふ)し、黠民(カツみん)従て狡詐を恣(ほしひまま)にすることを得べし」 *明六雑誌-三五号-天降説〈阪谷素〉「甚しき者は其私意を弄し、属吏黠民の欺詐に迷ひ」 *漢書-匈奴伝下「烏桓与匈奴無二状一、黠民共為二寇入一塞、譬如二中国有一盗賊一耳」

かつ-むし【勝虫】〔名〕昆虫「とんぼ(蜻蛉)」の異名。

かつ-めい クヮッ:【活命】〔名〕命を支えること。生活すること。なりわい。かつみょう。*新編追加-延応二年五月一二日(中世法制史料集一・追加法一四二)「寛喜飢饉之境節、或沽二卵子孫一、或放二券所従一、充二活命計一之間」 *易林本節用集「活命 クヮッメイ」 *読本・忠臣水滸伝-後・一〇回「我等父子身上つつがなく、今当地にすみてすぎはひをなしぬ。活命(クヮッメイ)の洪恩いかでかわすれ侍らん」 *西国立志編〈中村正直訳〉一一・一四「永く警悟の期なく真正の活命ある人となることは得がたかるべし」 古辞書易林・書言

かつ-めい【渇命】〔名〕飢えやかわきのために命があぶなくなること。また、その命。かつみょう。*甲陽軍鑑-品四〇下「いはれぬ主君の御蔭故、おのれが渇命をつなぐほどに如二此一」 *浮世草子・武家義理物語-六・三「女心にかなしく是をなげくに甲斐もなし。道を立(たち)てひとりくらせば、かつめいにおよび」 *雑俳・柳多留-初「御勝手はみなかつ命(めイ)におよんで居」

かつ-めん クヮッ:【滑面】〔名〕なめらかな表面。特に地質学で、断層面がみがかれたようになめらかなものをいう。鏡肌(かがみはだ)。 発音〈標〉ア(0)ス

かつも〔名〕方言植物、真菰(まこも)。群馬県勢多郡 221

かつ-も【且】〔副〕(副詞「かつ」に助詞「も」の付いてできた語) 一方でまた。*万葉-八・一六二六「秋風の寒きこの頃下に着む妹(いも)が形見と可都毛(カツモ)しのはむ〈大伴家持〉」

かつ-もく クヮッ:【刮目】〔名〕(「刮」は、こするの意) 目をこすってよく見ること。注意して見ること。刮眼(かつがん)。*随筆・茶山翁筆のすさび-一「中秋の月〈略〉尻海といふところに舟を泛(うかべ)しに天気不快、尚閏月は如何と刮目(クヮッモク)すると書中に云ひ来り」 *開化評林-岡部啓五郎編-明治七年・参議勝公鑑榎本書「実に鬼神遼来の名に愧ざる忠勇の士なるに刮目歎服せしのみ」 *当世文学の潮模様-北村透谷「当代文学の潮流真に憂ふ可き者あり。刮目(クヮッモク)して爾後の傾向如何を見ん」 *呉志-呂蒙伝裴注「蒙曰、士別三日、即更刮目相待」 発音〈標〉ア(0) 余ア(0)

かつ-もって【且以】〔副〕(副詞「かつ」に「もって」の付いてできた語) 下に打消を伴って、強い否定の気持を表わす。断じて。全然。*浄瑠璃・義経千本桜-四「静御前を預けしなんど御詮の趣(おもむき)、かつ以て身に覚へ候はずと」 *雑俳・柳多留拾遺-巻一四下「かつもってなどとちんじる草履とり」 *合巻・修紫田舎源氏-四「京近(きゃうぢか)なる田舎田舎を尋ね廻(めぐ)り候へども、かつもって手懸りなく」 古辞書易林

かつもと-せいいちろう:セイイチラウ【勝本清一郎】文芸評論家。東京に生まれる。慶応義塾大学卒。昭和初年からプロレタリア文学運動に加わり、ドイツに渡り国際革命作家同盟の活動に従う。のち、近代日本文学の文献的研究に業績を残す。著に「前衛の文学」「日本文学の世界的位置」「近代文学ノート」など。明治三二~昭和四二年(一八九九~一九六七)

かつもり〔名〕植物。やえなり(八重生)の異名。*物類称呼-三・緑豆 ぶんどう 東国にて、やへなりとよび又、とうろく共よぶ 畿内にて、ぶんどうといふ 遠江にて、とうごと云 備前にて、さなりといふ 伊勢にて、かつもりといふ」 方言①りょくず(緑豆)。静岡県藤枝 560 ②まくわうり(真桑瓜)。愛知県一部 024

かつや-か-す【創】〔他サ四〕(「かす」は接尾語) 飢えさせる。ひもじくさせる。飢(かつ)えさせる。*鑑草-五・一「鉄臼十六のとし終にかつやかしころしてけり」 *仮名草子・為愚癡物語-一・八「その身食に飢、砂をくらひ水をのみて死せし事は、母をかつやかせし因果によってなり」 補注「為愚癡物語」の「かつやかせし」は近世の慣用語法。正しくは「かつやかしし」になるはずのもの。

かつ-やく クヮッ:【括約】〔名〕しめくくること。集めて一つにすること。

かつ-やく クヮッ:【活躍】〔名〕①勢いよくおどること。活発にはねまわること。*吾輩は猫である〈夏目漱石〉七「苦しがって羽根を振(ふる)って一大活躍を試みる事がある」 ②大いに手腕をふるうこと。*満韓ところどころ〈夏目漱石〉一三「其憑悍が今蒙古と新しい関係が付いた為、頗る活躍してゐる」 発音〈標〉ア(0) 余ア(0)

かつやく-きん クヮッヤク:【括約筋】〔名〕収縮と弛緩(しかん)とによって、生体の器官を開閉する輪状の筋肉の総称。肛門部、尿道の周囲、胃の幽門部、瞳孔の虹彩などにある。*改正増補和英語林集成「K'watsuyakukin クヮッヤクキン 括約筋」*明暗-夏目漱石〉一五三「括約筋(クヮッヤクキン)を切り残したと仰しゃるけれども」 *銀二郎の片腕-里見弴「彼の耳の穴は、恰もそこに括約筋(クヮッヤクキン)が出来たやうに、略〈大きくも小くも、自在に締めたり緩めたりすることが出来るやうになってゐた」 発音〈標〉ア(2)ナ 余ア(2)

かつやま【勝山】(一)福井県北東部の地名。九頭龍(くずりゅう)川に沿い、小笠原氏の旧城下町で、藩政時代は勝山煙草の栽培で知られた。現在は機業工場が多い。昭和二九年(一九五四)市制。(二)岡山県北部の地名。旭川に沿い、もと高田と称し、三浦氏の旧城下町。(三)千葉県南西部、鋸南(きょなん)町の地名。海水浴場、漁業基地として知られる。加知山(かちやま)。 発音〈標〉ア(0)

かつやま【勝山】姓氏の一つ。 発音〈標〉ア(0)

かつやま【勝山】■江戸中期の遊女の名。同名の遊女は数人いたが、中でも江戸吉原新町、山本芳潤抱えの勝山が最も有名。初め神田の紀伊国屋風呂の湯女(ゆな)であったが、承応二年(一六五三)吉原に移り、太夫となった。だてな異風を好み、丹前風(たんぜ

んふう)、勝山髷(かつやままげ)などを流行させた。また、小歌、三味線にもすぐれていた。＊評判記・色道大鏡＝七「勝山伝 勝山諱張子、未〻詳＝其姓氏＝武州八王子之人也。正保三年丙戌、出＝世紀伊国風呂＝而号＝勝山＝」＊浮世草子・好色一代男＝一・六「抑(そもそも)丹前風と申は、江戸にて丹後殿前に、風呂ありし時、勝山といへるおんな、すぐれて、情もふかく、髪かたちとりなり、袖口広く、つま高く万に付て、世の人に替りて、一流是よりはじめて、後はもてはやして」＊浮世草子・好色盛衰記＝三・四「酒事(さけごと)も略〻いつぞのほど江戸の勝山が押へますといひはじめて呑(のむ)よし」 **二**〔名〕①「かつやままげ(勝山髷)」の略。＊随筆・独寝＝上・二一「江戸の洗ひ髪は、いかにしてもしゃれてよし。かつやまも面白し」＊滑稽本・浮世風呂＝三・下「勝山にお髪(ぐし)をおあげ遊ばして、さぞお美しかろう」 ②「かつやまかつら(勝山鬘)」の略。 発音〈標ア〉ツ

かつやまかつら【勝山鬘】〔名〕歌舞伎の女形の鬘の一つ。勝山髷(かつやままげ)を鬘につくったもので、「弁慶上使(べんけいじょうし)」のおさわ、「寺子屋」の戸浪など、女房、年増の役に用いる。勝山。 発音〈標ア〉カ

かつやまふう【勝山風】〔名〕「かつやままげ(勝山髷)」に同じ。＊随筆・異本洞房語園＝上「承応明暦の頃新町山本芳順が家にかつ山といふ太夫ありし。〈略〉髪は白き元結にて片曲のだて結び、勝山風とて今にすたらず」

かつやままげ【勝山髷】〔名〕江戸吉原の遊女勝山が結い始めた髪形。頭上後ろから白元結(しろもとゆい)で結んだ髪を、先を細めにし前向へ輪のように大きく丸く曲げて、笄(こうがい)を横にさす。時代により多少の変化があるが、のちには丸髷(まるまげ)の大形のものも称するようになった。勝山風(かつやまふう)。勝山結び。勝山。＊随筆・守貞漫稿＝一〇「京坂の新婦の既に歯を染て眉未剃ざる者往々島田に結はず勝山曲に結ぶ者あり。其形江戸の丸髷に似て聊か異也」

勝山髷〈歴世女装考〉

かつやまむすび【勝山結】〔名〕「かつやままげ(勝山髷)」に同じ。＊随筆・近世江都著聞集＝五「髪の結様を一流工夫して、世上多く時花(はや)りて勝山むすびと名付け、其風至極寛にして伊達ならず。後は諸侯太夫の室も是をまなび、今専ら士農工商の女房娘勝山と云髪を用る事也」

かつーゆ クッユ:【活喩】〔名〕「かつゆほう(活喩法)」に同じ。 発音〈標ア〉カ〔0〕

かつーゆ クッユ:【蛞蝓】〔名〕ナメクジの別称。＊薬品手引草「蛞蝓(クヮツユ)なめくじり」＊本草綱目＝虫部・蛞蝓・集解「別録曰、蛞蝓、生＝太山池沢、及陰地沙石垣下＝」

かつ・ゆ【飢・餓】〔他ヤ下二〕(ワ行下二段動詞「かつう(飢)」から転じて、室町頃から用いられた語。多くの場合、終止形は「かつゆる」)「かつえる(飢)」に同じ。＊運歩色葉「飢 カツユル」＊日葡辞書「Catçuye, uru, eta(カツュル)訳〉死ぬほど飢える、非常に飢えている」

かつゆ-せんにん【葛由仙人】中国、周代の仙人。「列仙伝」に見え、自分の彫った木の羊に乗って山に入り仙人になったといわれる。画題の一つ。 発音カツユセンニン〈標ア〉セ

かつゆ-ほう クッュハウ【活喩法】〔名〕修辞法の一つ。無生物をあたかも生き物、特に人間であるかのように表現する方法。「花が笑う」「海がほえていた」など。擬人法。活喩。＊新文章講話〈五十嵐力〉＝二・二・六「活喩法は無生物に生を賦与し、或は無生物、下等動物及び無形の精神作用を人に擬する詞姿である」 発音カツユホー〈標ア〉〔0〕

かつ-よ【割与】〔名〕土地や領地など所有物の一部をさいて、これを他に分け与えること。割譲。＊泰西国法論〈津田真道訳〉三・六「或は売買し或は之を数子に割与する事自在なり」

がつ-よい【我強】〔形ロ〕㊇がつよ・し〔形ク〕我が強い。強情である。意地っぱりである。＊浄瑠璃・信州川中島合戦＝三「さしもがつよき大将の、そぞろに袖をぞしぼらるる」＊浄瑠璃・源平布引滝＝二「是が残念残念とさしも我強(ガヅヨキ)大将も、子故の闇ぞ道理なる」＊桐一葉〈坪内逍遙〉五・一「恩義には勝てぬが人情、何ぼ我づよい御家老でも、二つ返事で靡かしやりましょ」＊児を盗む話〈志賀直哉〉「私はあの我強(ガヅヨ)い按摩に追ひかけられる夢で苦しめられた」 発音〈標ア〉ヨ

かつ-よう クッヨウ:【活用】〔名〕①いかして用いること。いかしてはたらかせること。利用すること。＊西国立志編〈中村正直訳〉一〇・二二「金銭を貯蓄するのみを事として、これを活用する目的なき人」＊文明論之概略〈福沢諭吉〉一・二「之を墨守して退くは之を活用して進むに若(し)かず」＊改正増補和英語林集成「Kwatsuyō(クヮツヨウ)スル〈訳〉略〉利用する。役立てる」 ②文法で、動詞などがその用法に従って組織的に語形を変化させること。また、その変化の体系。日本語の用言では、主として語尾に変化がある。これを用法によって統一的に整理した一覧表を活用表という。変化には、動詞型、形容詞型、形容動詞型があり、助動詞には、なお特別の型をもつものがあり、語形変化をしないで他の語の活用と同様の用法をもつものもある。＊俳諧・也哉抄「てにはの活用も、時世にすこしづつのかはりめ有といへども」＊御国詞活用抄＝凡例「第五の音はすべてよろづの詞に活用なし、第五の音にはたらかしいふものは悉く転訛の俗言なり」＊蘭学逕「heden heiden はヘイドの多を斥す、故に活用して諸字を帯る意あり」＊和英語林集成(再版)「Kuwatsuyō(クヮツヨウ)スル〈訳〉(文法)動詞として用いる。活用(変化)させる」 発音カツヨー〈標ア〉〔0〕〈奈ア〉〔0〕

かつ-よう クッヨウ【闊葉】〔名〕平たくて葉の面の広い葉。広葉。↔針葉。 発音カツヨー〈標ア〉〔0〕

がつ-よう グッヨウ【月曜】**一**仏語。七曜および九曜(九執)の一つ。胎蔵界曼荼羅では、外金剛部院の西方にあって、姿は肉色、右手に半月形の上に兎のいるものを捧げ、左手は握って胸にあて、むしろの上にすわっている。 **二**〔名〕①暦の用語で、日月五星の一つ。功徳を行ない、衣服を裁縫し、髪を洗い、爪を切り、新しい衣服を着るのに吉という(暦日諺解)。月曜星。 ②「がつようび(月曜日)」の略。

かつよう-けい クッヨウ:【活用形】〔名〕国語の用言、助動詞が活用してとる種々の語形。通常、文語文法においてはすべての活用語を通じて、未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形の六つを立て、口語文法では「已然形」のかわりに「仮定形」を立てる。これらは、文語動詞の活用で最も変化の多い ナ行変格活用の場合を基本としたので、他の型の活用や口語の活用では、同一の形が別の活用形に両属したり、一つの活用形に違った形が同居したりする。なお、このように整理された場合のほか、すべての変化形をいうこともある。 発音カツヨーケイ〈標ア〉〔0〕

かつよう-げん クッヨウ:【活用言】〔名〕①「かつようご(活用語)」の古い名称。 ②動詞のこと。鶴峯戊申(しげのぶ)の命名による。＊語学新書＝上・五「活用言(はたらきことば)第五 活用言は事物を活動せしむる辞也。漢にいはゆる活字也。これに動他、被動、自動の三等、及九法あり」 発音カツヨーゲン〈標ア〉ヨ

かつよう-ご クッヨウ:【活用語】〔名〕活用のある単語。日本語では一般に、用言(動詞、形容詞、形容動詞)に助動詞を加えたものをいう。活用言。活語。＊蘭学逕「四をウェルク・ウァールデンと云、活用語と翻す」 発音カツヨーゴ〈標ア〉〔0〕〈奈ア〉〔1〕

かつよう-ごび クッヨウ:【活用語尾】〔名〕国文法で、用言の語尾で活用の際に変化する部分の音節。現代口語の一段活用動詞では、助詞、助動詞に直接する部分(変化しない部分)の音節まで含めていう。 発音カツヨーゴビ〈標ア〉ヨ

かつよう-じゅ グッヨウ:【闊葉樹】〔名〕「こうようじゅ(広葉樹)」の旧称。 発音カツヨージュ〈標ア〉ヨ〈奈ア〉ヨ

がつよう-せい グッヨウ:【月曜星】〔名〕「がつよう(月曜)**一**①」に同じ。＊人情本・春色梅児誉美＝初・序「日あたりもよき梅の枝を、月曜星(グヮツヨウセイ)の尊前(みまへ)に供へ」

がつよう-び グッヨウ:【月曜日】〔名〕日曜の次の日。げつようび。がつよう。

かつよう-れんご クッヨウ:【活用連語】〔名〕活用する連語。一個以上の助動詞が自立語に連接して、全体として一つの用言と同様の機能を持つもの。「定められる」「定められず」「美しかるべし」など用言に連接したものだけをいう場合と、「雪だ」「花なり」のように体言に連接したもの、さらに、「雲のごとし」のように助詞を介在させた例を含めていう場合とがある。＊中等教科明治文典〈芳賀矢一〉二「用言と助動詞との連結せるものを活用連語といふ」

かつ-よく【渇欲】〔名〕のどがかわいて水を欲するように、強く思い望む気持。＊道程・高村光太郎〈万物と共に踊る「彼は自らに信憑し、自らの渇慾に羅針を据ゑる」＊或る女〈有島武郎〉前・八「一度生血の味をしめた虎の子のやうな渇慾が」

かつら【桂】〔名〕①カツラ科の落葉大高木。日本の各地と中国の山地に生える。高さ二五㍍、径一・五㍍をこえるものもある。樹皮は暗灰色で縦に裂け目がある。葉は長さ二―二・五センチ㍍の細い柄をもち、長枝には対生し短枝には単生する。葉身は長さ幅とも三―七センチ㍍の心臓形で、縁に鈍い鋸歯(きょし)があり、裏面は粉白色、雌雄異株。春、葉に先だって花被のない花を葉腋(ようえき)に単生。雄花は紅色の葯(やく)をつけたおしべ多数から成り、雌花は三―五個のめしべをもち柱頭は糸状で淡紅色を帯びる。花後、短柄のある、やや湾曲した円柱形果実を結ぶ。熟すと紫褐色となって裂け、一端に翼のある長さ五ミリ㍉ほどの種子をとばす。材は軽く柔らかく、木理(きめ)がまっすぐで変形が少ないので、建築・家具・彫刻材などに用いられる。本州の中・北部には、日本特産の、葉が大形で、種子の両端に翼があり、樹皮は老木となるまで裂けないヒロハカツラが産する。おかずら。かもかつら。しろかつら。かつらぎ。＊古事記＝上「傍の井の上に湯津香木有らむ。〈略〉香木を訓みて加都良と云ふ。木ぞ〉」＊新撰字鏡「楓 香樹 加豆良」＊本草和名「楓樹 一名櫃 一名格柜〈略〉和名加都良」＊源氏・花散里「大きなるかつらの木の追ひ風に、祭の頃おぼし出でられて」＊日本植物名彙〈松村任三〉「カツラ カモカツラ」 ②中国伝説で、月の世界に生えているという木。↓桂男(かつらおとこ)。＊万葉・四・六三二「目には見て手にはとらえぬ月の中の楓(かつら)のごとき妹をいかにせむ湯原王〉」＊古今・秋上・一九四「久方の月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらむ〈壬生忠岑〉」＊土左・承平五年一月一七日「水底(みなそこ)の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるはかつらなるらし」＊日葡辞書「Catçura(カッラ)〈訳〉月の中に現われる黒いもの」 ③桂むきにした生大根を丸めて切り、糸状にしたも

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

の。刺身のつまなどに用いる。④植物「にっけい（肉桂）」また「けいひ（桂皮）」の異名。＊改正増補和英語林集成「Katsura カツラ〈訳〉桂皮または肉桂皮。ニッケイに同じ」 補注「十巻本和名抄-一〇」では「桂」を「めかつら」、「楓」を「をかつら」とよむ。 語源説 (1)カヅ（香出）ラか（言元梯・大言海）。香出ヅルの義か（音幻論＝幸田露伴）。(2)カは香、ツラはツブラ（円）の略（松屋叢考）。(3)カツラヌク（香貫）の義（名言通）。(4)香がツラナって絶えないところから（本朝辞源＝宇田甘冥）。(5)日ノカゲツラナル（影連）の略（紫門和語類集）。(6)カツタハリ（香伝）花の義（日本語原学＝林甕臣）。 発音〈標ア〉[0]〈字史〉平安●●● 〈京ア〉[カ] 古辞書 字鏡・色葉・名義・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

かつらの影（かげ）（「かつら（桂）②」から）月の光。月の姿。＊源氏-松風「月のすむ河のをちなる里なればかつらのかげはのどけかるらむ」＊源氏-竹河「蔵人の少将の、月の光にかがやきたりしけしきも、かつらのかげに恥づるには、あらずやありけむ、雲の上近くては、さしも見えざりき」

かつらの花（はな）（「かつら（桂）②」から）月の光。月。《季・秋》＊俳諧・冬の日「なかだちそむる七夕のつま〈杜国〉 西南に桂のはなのつぼむとき〈羽笠〉」＊俳諧・観月楼句集「散初むる桂の華や暮の闇ニ一柳〉」

かつらの人（ひと）「かつらおとこ（桂男）①」に同じ。＊新拾遺-雑上・一六三五「月の内のかつらの人を思ふとて雨に涙のそひてふるらん〈七条后〉」

かつらの星（ほし）銚子の柄につけた、菊の花の紋のある金具。菊金（きくがね）。

かつらの眉（まゆ）（「かつら（桂）②」から）三日月のような細い美しい、女の眉。＊謡曲・檜垣「翡翠（ひすい）の鬢（かづら）花萎（しを）れ、桂の眉も霜降りて」＊仮名草子・恨の介-上「翡翠の髪（かん）ざしは〈略〉楊柳の風に靡（なび）くが如し。かつらのまゆは青ふして」＊浮世草子・好色五人女-三・一「祇園会の月鉾（つきぼこ）、かつらの眉（マユ）をあらそひ、姿は清水の初桜」

かつらの黛（まゆずみ）（「かつら（桂）②」から）三日月のような形に細く眉をひいた墨。また、その眉。美しい女性のまゆずみにいう。＊謡曲・定家「月の顔はせも曇りがちに、桂の眉墨も、おちぶるる涙の露と消えても」＊御伽草子・猿源氏草紙「嬋娟（せんげん）たる鬢（びん）、かつらのまゆずみ、柔和の姿引きかへて」

かつらの都（みやこ）（「かつら（桂）②」から）月の都。＊草枕〈夏目漱石〉七「桂の都を逃れた月界の嫦娥（じゃうが）が、彩虹（にじ）の追手に取り囲まれて」

かつらの女（め）「かつらめ（桂女）②」に同じ。＊三十二番職人歌合-五番「桂の女。春風にわかゆの桶を戴きて袂もつじが花を折るかな」

かつら 焼き玉（たま）**炊**（かし）**ぐ**（「戦国策-楚策」の「対曰、楚国之食貴ニ於玉一薪貴ニ於桂一」から）日常必要の品さえ桂や玉より高く思われる苦しい生活をいう。また、願いのとげられないことをいう。桂玉（けいぎょく）の艱（かん）。＊志濃夫廼舎歌集十春明草「桂焼き玉かしがする年ごろを藻塩の煙わびやたつらむ」

かつらを折る（すぐれた人材を桂の木の枝にたとえた「晉書-郤詵伝」の故事から）昔、官吏登用試験に文章生（もんじょうしょう）が及第することをいう。＊源氏-藤裏葉「かざしてもかつたどらるる草の名はかつらをおりし人や知るらん」＊拾遺-雑上・四七三「久方の月の桂もおる許（ばかり）家の風をも吹かせてし哉〈道真母〉」＊今鏡-一・雲井「廿二日に上東門院に御幸（みゆき）ありて、かつらをおる試みさせ給ふ」＊白居易-喜敏中及第詩「桂折一枝二先許一、我楊穿ニ三葉一尽驚ニ人一」

かつらを科（かそ）**えて**「科（はか）**りて**」**炊**（かし）**ぐ**（「戦国策-楚策」の「対曰、楚国之食貴ニ於玉一薪貴ニ於桂一」を、桂よりも値段の高い薪と、玉よりも値段の高い食物とによって暮らす意にとって）富貴な、ぜいたくな生活をいう。＊読本-椿説弓張月-後・二六回「前駈後従のいかめしきに冊（かしつか）れ、桂（カツラ）を科（カゾ）へて炊（カシ）き、玉を科て食ひ、富貴両（ふたつ）ながら得たりしも」＊読本-旬殿実々記-七・二〇「米には玉を科（はかり）て食ひ、薪には、桂（カツラ）を科（ハカリ）て炊（カシガ）し、錦にまつはり、綾に臥ても」

かつら【鬘】《名》（「かづら」とも）①上代、青柳、アヤメ、ユリ、藻草、稲穂などの種々の植物を、髪の飾りとしたもの。「うず」や「かざし」が枝のまま髪に突きさしたのに対し、髪に結んだり、巻きつけたり、からませたりして用いた。元来は、植物の生命力を身に移そうとした、感染呪術に基づく。＊万葉-五・八一七「梅の花咲きたる園の青柳（あをやぎ）は可豆良（カヅラ）にすべくなりにけらずや〈粟田大夫（名未詳）〉」＊霊異記-上・一「緋の纈（カツラ）を額（ぬか）に著け、赤き幡幷（はたほこ）を擎（ささ）げて〈興福寺本訓釈纈 可川良〉」＊紫式部日記-寛弘五年一一月二〇日「五節は廿日まゐる。〈略〉右宰相中将の、五節にかつら申されたるつかはすついでに」＊俳諧・田舎の句合-二五番「町神楽店前（てんぜん）の日かげをかづらとし」②髪の薄い人、短い人などが添え加えた髪。そえがみ。かもじ。＊十巻本和名抄-六「髢 釈名云髢〈音被 加都良 俗用鬘字非也。鬘者花鬘〉髪少者所以被助其髪也」＊源氏-蓬生「わが御ぐしの落ちたりけるを取り集めてかつらにし給へるが、九尺余ばかりにて、いと清らなるを」＊今昔-二九・一八「その御髪（ぐし）の長（たけ）に余りて長ければ、其を抜き取りて、鬘（かつら）にせむとて抜くなり」③種種の髪型に作って頭にかぶるようにしたもの。もと演劇用として発達したが、現在では髪型を変えるためなどに一般にも用いられている。＊歌舞伎・傾城壬生大念仏-上「彦六は非なく女の鬘を被（かづ）き、小袖を着更へ面を着て」＊即興詩人〈森鷗外訳〉謝肉祭「頭に戴けるは『フイノッキイ』〈俗曲中にて無遠慮なる公民を代表したる役なり〉の仮髪（カツラ）にて」④植物「かもじぐさ（髢草）」の異名。 語源説 (1)カミツラ（髪蔓）の略（玄同放言・雅言考・大言海）。(2)カミツラナル（髪連）の義（日本釈名・言元梯・言葉の根しらべ＝鈴江潔子）。髪にツラネル（聯）義（日本語源＝賀茂百樹）。(3)首蔓の急呼（箋注和名抄）。 発音 舎史〉中世まで『かづら』か。③は、近世以後『かづら』『かつら』の両様となり、現代では能楽関係ではカズラ、その他はカツラと発音している。〈標ア〉[0] 〈京ア〉カズラ [カ] 古辞書 和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

かつら【桂】京都市右京区桂川西岸の地名。桂離宮がある。＊源氏-松風「かつらにみるべきことはべるをいさや心にもあらでほどへにけり」＊俳諧・初心もと柏「菜の花や淀も桂もわすれ水」 発音〈標ア〉[0] [カ]

かつら【桂】姓氏の一つ。 発音〈標ア〉[カ]

かつら-こころう【桂小五郎】幕末～明治初期の政治家、木戸孝允（たかよし）の前名。

かつら-こそん【桂湖村】中国文学者。名は五十郎。新潟県出身。早稲田大学教授。根岸派に属し漢詩にすぐれ、陶器の研究でも知られる。著「漢籍解題」。明治元～昭和一三年（一八六八～一九三八）

かつら-たろう【桂太郎】政治家、陸軍大将。長州藩出身。山県有朋の直系として陸軍次官、各内閣の陸相を経る間にドイツ式兵制の確立、北清事変への出兵などにあたった。明治三四年（一九〇一）以後三回組閣。日英同盟を結び、日露戦争を断行。社会運動を弾圧し日韓併合を行なったが、第三次内閣は憲政擁護運動の攻撃をうけて崩壊。弘化四～大正二年（一八四七～一九一三）

かつら-はるだんじ【桂春団治】初代。大阪の落語家。本名、川田藤吉。後姓、岩井。桂文我、のち七代桂文治に入門。旧来の上方落語の風を破り、奇抜なナンセンスを取り入れて新しい芸風を樹立。明治一四～昭和一二年（一八八一～一九三七）

かつら-ぶんじ【桂文治】六代。落語家。四代の長男。前名、文楽（三代）。後名、楽翁。江戸の人。道具入り芝居噺（しばいばなし）を得意とし、「上野戦争」「高橋お伝」「西郷隆盛」などの際物（きわもの）を上演。弘化三～明治四四年（一八四六～一九一一）

かつら-ぶんらく【桂文楽】落語家。㈠四代。本名、新井文三。前名、文七、文鏡。六代桂文治に師事し、花柳界物を得意とした。天保九～明治二七年（一八三八～九四）㈡八代。本名、並河益義。前名、さん生、馬之助。桂小南、八代桂文治、五代柳亭左楽に入門。きめこまかな演出、芸風で知られた。明治二五～昭和四六年（一八九二～一九七一）

かつら-みきすけ【桂三木助】落語家。㈠二代。本名、松尾利雄。二代桂南光、橘家円喬（たちばなやえんきょう）に師事。東西落語の生き字引と称され舞踊にも巧みであった。明治二七～昭和一八年（一八九四～一九四三）㈡三代。本名、小林七郎。前名、柳昇、小柳枝、橘の円（まどか）。春風亭柳橋、二代三木助に師事。江戸前の繊細な芸風で人気を得た。明治三五～昭和三六年（一九〇二～六一）

がつら『助』方言動詞の連用形に付いて、その動作と共に他の動作をすることを示す。がてら。「歩きがつら考える」静岡県566 対馬933《がつな》琉球宮古島044

かつら-あめ【桂飴】《名》山城国（京都府）桂の里で産した名物の飴。桂女（かつらめ）が所司代に献上したり京の町を売り歩いたりした。＊雍州府志-六「飴糖〈略〉桂里之製造細密而甘美形如ニ竹管一是謂ニ桂（かつら）飴一或称ニ管飴一」＊随筆・遠碧軒記-下・二「桂飴は西岡桂の孫夜叉と云女子、飴を禁裏へ上ぐ、八幡の安居頭にも来り、めづらしき笠を着て来、代々孫夜叉と云ふ」＊浄瑠璃・菅原伝授手習鑑-一「泣子のロへは地黄煎玉（ちゃうせんだま）、拠其外平野飴、桂の里には桂飴」 発音〈標ア〉[カ]

かつら-あゆ【桂鮎】《名》京都の桂川でとれた鮎。中古、桂の里から宮中へたびたび奉ったことからいう。＊新撰六帖-三「朝な朝な日なみそなふるかつら鮎あゆみをはこぶ道もかしこし〈藤原信実〉」＊雑俳・替狂言「とるとると・蓼巻て喰桂鮎」 発音〈標ア〉[ア] [ラ]

かつら-あわせ［あはせ］【鬘合】《名》（「かづらあわせ」とも）「かつら（鬘）③」を使用するときに、前もって自分の頭に合うものを選んだり、注文を出したりして具合を調整したりすること。 発音〈標ア〉[ア] 〈京ア〉[ア]

かつら-いし【葛石】《名》⇩かずらいし（葛石）

カツーライス《名》（洋語 カツレツの略＋英 rice）カツと御飯とをセットにしたもの。＊放浪記〈林芙美子〉「『ねえ、洋食を食べない？』『ヘエ？』『カレーライス、カツライス、それともビフテキ？』＊力士と双生児〈舟橋聖一〉三「お梅は、カツライスを二人分、揃へながら」 発音〈標ア〉[ラ]

かつら-いと【鬘糸】《名》（「かづらいと」とも）下げ髪を結ぶのに用いる糸。＊類聚雑要抄-二「保延六年十一月四日甲辰、土御門内裏移御〈略〉童女四人〈略〉鬘絲 紫」

かつら-うち【桂打】《名》輪切りにした大根、胡瓜を桂むきにし、それをさらに千切りにして、刺身のつまにすること。また、そのもの。

かつら-お：を【桂男】《名》①「かつらおとこ（桂男）①」に同じ。＊夫木-一三「かつらをの月の船漕ぐあまの

海を秋は明石の浦といはなん〈聖信〉*雑俳・柳多留-七二「かつら男のやせこけて出る闇あがり」②「かつらおとこ(桂男)②」に同じ。*俳諧・古今俳諧明題集-夏「桂壮士(カツラヲ)の人にはさまるすずみかな〈さよ〉」

かつらおうぎ ：あふぎ【鬘扇】〖名〗(「かづらおうぎ」とも)能楽で、鬘物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵扇。発音カツラオーギ 標ア

かつらおけ ：をけ【鬘桶】〖名〗(「かづらおけ」とも)能楽、狂言、歌舞伎などの舞台で用いる腰掛け。高さ一尺五寸(約四五センチメートル)、直径一尺(約三〇センチメートル)の黒塗り蒔絵の丸桶で、ふたは酒杯として代用されることもある。もとは鬘を入れたものといわれる。つづみおけ。*わらんべ草-一「つづみおけの中に、つづみを入、則おけにこしかけし、今のかつらおけの事なり」*随筆・異本洞房語園-上「今のかつら桶は古代にはつづみ桶といひ、太夫は牀机を用ひ、囃方はかつら桶を用ひしが、いつの頃か太夫はかつら桶、囃方は牀机になりしともいふ」*歌舞伎・勧進帳「ト富樫上手へ戻り葛桶にかかる」語源説(1)もと、鬘をいれたものか〔大辞典〕。(2)カヅラをかけた桶の義か。カヅラは京都でタガ(箍)をいう〔大言海〕。(3)桂の里から出たところから〔甲子夜話続篇〕。発音標ア

鬘桶

かつらおとこ ：をとこ【桂男】【鬘】〖名〗①(「かつら(桂)②」から)月の世界に住んでいるという伝説上の男。かつらお。かつらおのこ。桂の人。《季・秋》*狭衣物語-四「かつらおとこも、同じ心に『あはれ』とや見奉るらん。暑げにたち曇りたりつる村雲も晴れて、月影はなやかに差し出でたるに」*梁塵秘抄-二・二句神歌「月は船星は白波雲は海、如何に漕ぐらんかつらおとこは唯一人して」*譬喩尽-三「月を久ふ詠めて居ぬもの。月の中の桂男(カツラオトコ)に招かるると三年の中に死ぬる」②容姿のりっぱな男。美男子。かつらお。かつらおのこ。*浄瑠璃・出世景清-道行「手にはとられぬかつらおとこの、ああいぶりさは、いつあをのりもかだのりと、身のさがらめをなのりそや」*人情本・春色梅児誉美-三・一三齣「噂にも気だてが粋でなりふりまでも、いきではすはでしゃんとして、桂男(カツラヲトコ)のぬしさんにほれたがえんかエェ」補注「西陽雑俎-天咫」に、古くからの言い伝えとして、月の中に高さ五〇〇丈の桂があり、その下で仙道を学んだ呉剛という男が、罪をおかした罰としていつも斧をふるってきりつけているが、きるそばからそのきり口がふさがる、とあるのによる。古辞書書言

かつらおとめ ：をとめ【桂乙女】〖名〗「かつらめ(桂女)②」に同じ。*白羊宮〈薄田泣菫〉望郷の歌「桂をとめは河しもに粱誇(やなぼこり)する鮎汲みて」

かつらおのこ ：をのこ【桂男】〖名〗「かつらおとこ(桂男)」に同じ。*仮名草子・薄雪物語-上「三界を照らし給ふ月だにも、かつらをのこはありながら、雲路にしのぶならひあり」

かつらおび 【鬘帯】〖名〗(「かづらおび」とも)①「かつらまき(桂巻)」に同じ。②能楽で、鬘を結う時、額の上でしめて鬘の上から後ろで結び、長く垂らしておく帯。のち、人形浄瑠璃、歌舞伎などでも用いた。かつらはちまき。*申楽談儀-能の色どり「かづらをびの広きだに見苦しきに、赤き帯などする、返す返す俗(しょく)也」*虎寛本狂言・長光「丸はだかにしてやりませう。夫が能らう。おのれ憎いやつの。水破にちがひはない〈と云てとらへてつぼ折をとる。下にたすきをかけ、夫に女帯かつら帯、其外結付て有るを見て〉」*浮世草子・新可笑記-一「小てふ菊若ふたりの美児、〈略〉しら綾のかづら帯〈ヲビ〉、紅粉(こうふん)は白皮をいろどり」*随筆・八十翁噺話「先大将の人形は烏帽子直垂を着、〈略〉女の主人には髪をすべらかし、かつら帯(オビ)かけて、召仕の女迄、すべらかし、かつら帯(オビ)」発音標ア 奈ア

かつらおり 【桂織】〖名〗山城国(京都府)桂の里で産出した織物。*雑俳・広原海-一八「公事の場の羽織吉事の桂織」

かつらおんな ：をんな【桂女】〖名〗「かつらめ(桂女)」に同じ。

かつらか ：クヮ【桂科】〖名〗双子葉植物の一科。アジア東部の特産科で一属三種が知られている落葉高木。葉は対生または互生し托葉があり、長い葉柄をもつ。花は雌雄異株、蕚(がく)片は四。花弁はない。果実は袋果で多数の種子がある。発音標ア〇

かつらがお ：がほ【鬘顔】〖名〗(「かづらがお」とも)役者などが、鬘をつけた時の顔。*浮世草子・男色大鑑-八「先はかづら負(ガホ)雲まの月わづかに出るに異ならず」

かつらがかり 【鬘懸】〖名〗(「かづらがかり」とも)鬘をつけた様子。鬘をつけた時の姿態やおもむき。*仮名草子・元の木阿弥-上「かづらがかりは女共見えず、おとこ業平の若さかり、此上村はよもあらじと」

かつらがけ 【鬘掛】〖名〗(「かづらかけ」とも)劇場の楽屋などで、鬘をかけて置く台。鬘台。*戯場訓蒙図彙-六「かつらかけ。台の足は長くこしらへて下へしく也」発音標ア

かつらがこ 【桂籠】〖名〗①(もと山城国(京都府)桂川の鮎漁に用いたところからいうか)鮎を入れるための籠。鮎籠。②花入れの一つ。鮎籠を茶人利休が応用したもの。発音カツラカゴ 標ア

かつらかご 【桂駕】〖名〗「かご」は櫂(かい)の意)月の世界にあるという桂の木で作った船のかい。*万葉-一〇・二二二三「天(あめ)の海に月の船浮う)け桂梶(かつらかぢ)かけて漕ぐ見ゆ月人壮子(つきひとをとこ)〈作者未詳〉」

かつらかっら 〖副〗(多く「と」を伴って用いる)声高く笑うさまを表わす語。主として勇者、豪傑などの高笑いにいう。からから。かんらかんら。かっらから。*浄瑠璃・花洛受法記-一「為成かっらかっらとわらひ」*浄瑠璃・曾根崎心中「九平次かっらかっらとわらひ」

かっらから 〖副〗(「と」を伴って用いることもある)「かっらかっら」に同じ。*浄瑠璃・通俗傾城三国志-四「あの大あせのふびんやと、たっかたっかと罵て、かっらからとぞわらひける」

かつらがわ ：がは【桂川】㈠京都市西部を流れる川。大堰(おおい)川が京都盆地に流入して淀川に合流するまでの部分をいう。*土左-承平五年二月一六日「あまぐものはるかなりつるかつらがはそでをひでてもわたりぬるかな」*今昔-二四・三八「かつらがはの月の光に水まさり秋の夜ふかくなりにけるかな」㈡山梨県東部、相模川の上流部の称。山中湖から発して神奈川県に入るまでをいう。発音カツラガワ 標ア 奈ア 古辞書色葉・文明・易林・書言

かつらがわ かっらがは【葛川】(「かづらかわ」「かづらがわ」とも)滋賀県大津市、安曇(あど)川上流、比良山西麓の地名。*今昔-一三・二「葛川(かづらかは)云ふ所に籠て修行する僧有けり」*宇治拾遺-一五・八「比良山(ひらさん)の西に、葛川の三滝といふ所にも、通(かよ)ひて行給けり」発音カッラガワ 倉史 近世初頃までは第二拍は「づ」と濁る。標ア

かつらがわ かっらがは【桂川】姓氏の一つ。発音カツラガワ 標ア

かつらがわくにのり 【桂川国訓】江戸中期の医者。桂川家三代。通称、甫三(ほさん)。号、湖月楼。父祖の業を継いで幕府の奥医師となる。外科にすぐれ、中国の医書から瘡瘍(そうよう)に関する箇所を抜粋、考証して「瘍府」を著わした。享保一三～天明三年(一七二八～八三)

かつらがわほさん 【桂川甫粲】江戸後期の医師、蘭学者、戯作(げさく)者、狂歌作者。本姓、森島。号は森羅亭万象、竹杖為軽など。洒落本、滑稽本、読本、黄表紙を多数著わし狂歌にもすぐれた。宝暦四～文化五年(一七五四～一八〇八)

かつらがわほしゅう 【桂川甫周】蘭医。江戸幕府の医官。㈠桂川家四代。国訓(くにのり)の子。名は国瑞。号、月池。江戸の人。将軍徳川家齊の侍医。杉田玄白らとともに『解体新書』を翻訳。また、蘭書『魯西亜志(ろしあし)』を抄訳したり、ロシアの様子を書いた『北槎聞略(ほくさぶんりゃく)』を著わす。宝暦元～文化六年(一七五一～一八〇九)㈡桂川家七代。名は国興。号、月池。江戸の人。安政五年(一八五八)、オランダ人ズーフらの作成した「ズーフ・ハルマ(和蘭字彙)」を出版。文政九～明治一四年(一八二六～八一)

かつらがわほちく 【桂川甫筑】江戸中期の蘭医。桂川家初代。本姓、森島。名は邦教。通称、小助。大和の人。平戸藩医嵐山甫安、のち長崎の蘭医ダルネル＝アルマンスに外科医術を学び、幕府の医官となる。オランダの使者と対話し、海外事情を聴取。著に「仙鼎方」がある。寛文元～延享四年(一六六一～一七四七)

かつらがわりきぞう かっらがはりキザウ【桂川力蔵】歌舞伎「檜太鼓成田仇討(やぐらだいこなりたのあだうち)」の通称。発音カツラガワリキゾー 標ア

かつらがわれんりのしがらみ かっらがはレンリのしがらみ【桂川連理柵】浄瑠璃。世話物。二段。菅専助作。安永五年(一七七六)大坂北堀江座初演。京都の桂川に十四、五の娘と五十男の死体が流れついた巷説を脚色。信濃屋の娘お半と隣家の四十男帯屋長右衛門とが伊勢参りの石部の宿での契りから、お半は懐妊、二人は桂川で心中する筋。

かつらぎ 【桂木】〖名〗「かつら(桂)①」に同じ。*続古事談-四「此所のひつじさるの方に桂木のありけるを切て、自手等身の千手観音を作て」方言広島県021 福岡県嘉穂郡020

かつらぎ 【葛城】〖名〗綿織物の一種。厚地の綾織り綿布。生地で輸出するときは太綾といわれ、葛城の名称は国内で使う。服地、白衣用。岡山県が主産地。葛城織。発音カツラギ 標ア〇

かつらぎ 【葛城】(「かづらき」とも)㈠奈良県西部、金剛山の東斜面一帯の地域。「日本書紀」によれば、神武天皇が平定した赤銅八十梟師(あかがねのやそたける)の住んでいた所。高尾張邑(たかおはりのむら)。*万葉-二・一六五・題詞「移二葬大津皇子屍於葛城二上山之時」*延喜式・祝詞・祈年祭(九条家本訓)「吉野・宇陀(うだ)・都祁(つげ)・葛木(かづらき)と御名は白して、辞竟へまつらば」㈡ゆかずらき(葛城)㈢。語源説(一)について(1)神武天皇の時、高尾張の村の土蜘蛛をカヅラ(葛)の網を結って襲い殺したので、その地をカツラッキの義から呼んだもの。ツキは網をつくる意のスクの連用形から〔東雅〕。(2)カツラキという氏族が居住したところから。また〔常陸風土記〕に、石城に対し茨城という地名があるように、シキ(磯城)のシ(石)に対してカツラ(葛)を用いたものか〔日本古語大辞典＝松岡静雄〕。発音カツラギ 倉史 近世まで『かづらき』と第二拍濁音、第四拍清音。標ア〇 字史 鎌倉●●●● 奈ア〇 古辞書易林

かつらぎの神 (かみ) 奈良県葛城山の山神。特に、一言主神(ひとことぬしのかみ)。また、昔、役行者(えんのぎょうじゃ)の命で葛城山と吉野の金峰山(きんぷせん)との間に岩橋をかけようとした

一言主神が、容貌の醜いのを恥じて、夜間だけ仕事をしたため、完成しなかったという伝説から、恋愛や物事が成就しないことのたとえや、醜い顔を恥じたり、昼間や明るい所を恥じたりするたとえなどにも用いられる。＊枕-一六一・故殿の御服のころ「人にな語り給ひそ。かならずわらはれなん」といひて、あまりあかうなりしかば、『かづらきの神、いまぞすちなき』とて、逃げおはしにしを」＊源氏-夕顔「急ぎ来る者は、〈略〉橋よりも落ちぬべければ、『いで、このかづらきのかみこそ、さがしうし置きたれ』とむつかりて、物のぞきの心もさめぬめり」＊拾遺-雑賀・一二〇一「いはばしの夜の契りもたえぬべしあくるわびしき葛木の神〈春宮女蔵人左近〉」＊浄瑠璃・冥途の飛脚-下「とがむる声のたかま山、あのかづらきのかみならで、昼のかよひぢつつましく、身をしのぶ道恋の道、われからせばきうき世の道」 発音〈標ア〉カ²

かつらぎ-おり 【葛城織】〖名〗名詞「かつらぎ(葛城)」に同じ。 発音カツラギオリ〈標ア〉⓪

かつらぎがも 【葛城鴨・葛城賀茂】 ⇨かずらきがも(葛城鴨)

かつらぎ-さん 【葛城山】(「かづらきさん」とも) (一) 奈良県と大阪府の境、金剛山地にある山。広くは、金剛山を含めていう場合がある。修験道最古の霊場。標高九六〇㍍。 (二) 和歌山県と大阪府の境、和泉山脈の主峰。ブナの林は天然記念物。標高八五七㍍。和泉葛城。＊浮世草子・名残の友-五・五「東にかづらき山あきしの里、高安(たかやす)につづきてくらかり」 発音カツラギサン〈標ア〉⓪

かつらぎ-でら 【葛木寺】(「かづらきでら」とも) 聖徳太子建立の七寺の一つ。葛城氏の氏寺ともいわれ、大同年間(八〇六～八一〇)まで栄えた。旧跡は奈良県橿原市和田町、御所市朝妻など諸説ある。葛木尼寺。妙安寺。 発音カツラギデラ〈史〉近世まで『かづらきでら』。〈標ア〉⓪

かつらぎてんぐ 【葛城天狗】 ⇨かずらきてんぐ(葛城天狗)

かつらぎ-の-そつひこ 【葛城襲津彦】 大和時代の武将。武内宿禰の子。磐之媛命(いわのひめみこ)・仁徳天皇の皇后)の父。四世紀末頃、大和朝廷と朝鮮との軍事・外交上の重要人物。神功皇后五年、新羅(しらぎ)を討伐。生没年未詳。

かつらぎのたかおか-の-みや かつらぎのたかをか- 【葛城高丘宮】 綏靖天皇の皇居。大和国高宮郷(奈良県御所市森脇)にあった。綏靖紀元年に都し、同三三年天皇の崩御とともに廃都。 発音カツラギノタカオカノミヤ〈標ア〉⓪

かつらぎのひとことぬし-じんじゃ 【葛城一言主神社】 奈良県御所市にある神社。旧県社。祭神は一言主大神(ひとことぬしのおおかみ)。

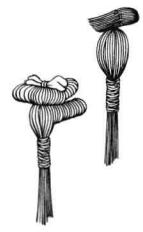
かつらぎ-やま 【葛城山】(「かづらきやま」とも) (一) に同じ。＊古事記-下「又一時(あるとき)、天皇葛城山の上に登り幸(い)でましき。爾に大猪(おほゐ)出でき」＊万葉四・五〇九「家のあたり 吾立見れば 青旗(あをはた)の 葛木山(かづらきやま)に たな引ける 白雲隠る 丹比笠麻呂」＊文明本節用集「葛城山 カツラキヤマ」 (二) 「かつらぎさん(葛城山)(二)」に同じ。 発音カツラギヤマ〈音史〉近世まで「かづらきやま」。〈標ア〉⓪〈ア史〉鎌倉●●●●●○ 〈余ア〉⓪ 古辞書文明・黒本・書言

かつら-ぐさ 〖名〗植物「まおう(麻黄)」に同じ。 発音カツラグサ〈標ア〉⓪

かつら-ぐさ 【鬘草】〖名〗(「かづらぐさ」とも) 植物「かもじぐさ(髢草)」の異名。《季・春》＊俳諧・犬子集-一・春草「よめがはげのそへがみとなれかつら草」＊浄瑠璃・用明天皇職人鑑-道行「おもひいでずや有し夜の、みだれあひにし枕には、かづらくさをぞおもひ思ふ」＊俳諧・年浪草-春・三「鬘草 カツラクサ 本名未詳。〈略〉女児春月採」之結」髪組」髷のまねびとす」 発音カツラグサ〈標ア〉⓪

かつら-ぐすり 【桂薬】〖名〗元禄(一六八八～一七〇四)の頃京都で売られた薬の名。＊国花万葉記-一・上「丸散名方薬之分 桂薬(カツラクスリ) 瘡毒湿気 室町四条下」

かつら-こ 【鬘子】〖名〗(「かづらこ」とも) 鬘草で髪の形を作った人形。女児がもてあそぶ物。→鬘子の節供。＊随筆・骨董集-下・後・三四「九月九日髪葛子(カヅラコ)の図」


鬘子〈骨董集〉

かつら-こ の 節供(せっく) 愛知県から三重県にかけての地方で、鬘草で島田髷、丸髷を作り、紙の着物を着せて流す行事。九月中、九月九日、三月節供などに行なわれる。＊随筆・骨董集-下・後・三四「九月九日を、かづら子(コ)の節供(セック)ととなへ、ひいな草つみて、ちひさく男女の頭をつくり、これも棚にすゑ、おなじごとく物そなへてまつるとぞ」

かつら-ごと 【鬘事】〖名〗 ⇨かずらごと(鬘事)

かつら-し 【鬘師】〖名〗(「かづらし」とも) 鬘②③をつくる職人。＊劇場新話-上「三階稽古場座並鬘師の事 附鬘名目の事」＊大川端〈小山内薫〉三四「正雄は役者の芸術的意見よりは、大道具や鬘師(カツラシ)の職人的苦心に教へられるところが多かった」＊腕くらべ-永井荷風〉三三「芝居の小屋主を始め鬘師や衣裳方道具方なぞへの諸勘定を

鬘師〈人倫訓蒙図彙〉

払はぬ為め」 発音〈標ア〉ヲ

かつら-した 【鬘下】〖名〗(「かづらした」とも) ①江戸時代、歌舞伎俳優が鬘をかぶりやすいように髻(びん)、髷(たぼ)を引っつめにした髪形。楽屋で床山が結い直したもの。鬘下地。楽屋銀杏(がくやいちょう)。＊戯場楽屋図会-下「床山。中通小詰楽屋に入て此所にて髪をほどき、かづら下にし」 ②女の髪形の一つ。銀杏(いちょう)返しの髷(まげ)の低い形で、女性の素踊りの際によく用いる。鬘下地。 発音〈標ア〉⓪ タ

かつら-したじ :したヂ【鬘下地】〖名〗(「かづらしたじ」とも)「かつらした(鬘下)」に同じ。＊吾妻余波〈岡本昆石編〉-仮鬘下地(カツラシタヂ)。躍りの師匠又躍子女形俳優常に此風多し」＊若葉かげ〈樋口一葉〉「いてふ髷わりからこ ちご髷 かつらひたぢ 今まではゆふ人あり」＊見果てぬ夢〈永井荷風〉二「店の若いものと鬘下地(カツラシタヂ)に結ったままの姿で、後先の考へもなく駈落ちしたと云ふ」 発音〈標ア〉タ ヲ

かつら-ずれ 【鬘摺】〖名〗鬘③をしばしば用いるために皮膚がすれて、傷やあとがつくこと。また、その傷やあと。＊大道無門〈里見弴〉厄日・一「鬘摺で黒くなった顱頴(こめかみ)には」 発音〈標ア〉⓪

かつら-だい 【鬘台】〖名〗(「かづらだい」とも)「かつらかけ(鬘掛)」に同じ。

かつらだ-ふじろう :フジラウ【桂田富士郎】 医学者。医学博士、理学博士。石川県に生まれる。石川県立医学校卒。日本住血吸虫の発見者。学士院賞受賞。慶応三～昭和二一年(一八六七～一九四六)

かつら-づき 【桂月】〖名〗陰暦八月の異称。けいげつ。 発音〈標ア〉ヲ

かつら-つけ 【鬘付】〖名〗①(「かづらつけ」とも) 役者とその扮する役名とを書いた帳面。興行に先立って狂言作者が作成。これによって役者と鬘師とが鬘合わせをする。 ②小児の玩具の一つ。切り抜いた種々の紙の鬘③を、役者の似顔絵などの頭にあてて遊ぶもの。

かつら-づつみ 【桂包】〖名〗「かつらまき(桂巻)」に同じ。＊甲陽軍鑑-品三二「甲を脱ぎ白布の手巾をもって、桂包(カツラツミ)と云ふ物に頭を包み」＊随筆・嬉遊笑覧-二上「かつら包は、室町日記甲陽軍鑑などにもみえたれども、昔は賤女なべて頭を包みたるが、後に桂巻と書は、桂女にのみ其風残りたれば、然いひけるなれど、かつらは長き意にて髪をいふなり、桂女のことにはあらず

かつら-て 【桂手】〖名〗(「かづらて」とも) 桂の葉のように、左右たがいちがいであること。＊満佐須計装束抄-二「羅をたたみて、色々の糸にてかづらてに蝶・小鳥を縫ひたり」

かつら-なわ :なは【桂縄】〖名〗魚類をおどして網の中へ追い入れる道具の一種。一本の網に桂の木の板を多数つけたものを二人でおのおの両端を持って海中を移動させて魚類を網の中に追いこむ。

かつら-の-みや 【葛蘆】〖名〗木の実と草の実か。＊妙法蓮華経平安後期点-薪と、及ひ、菓蓏(カツラノミ)とを採りて、時に随ひて恭敬して与へき」 古辞書名義

かつら-の-みや 【桂宮】四親王家の一つ。正親町(おおぎまち)天皇の皇子陽光院から出た。陽光院の皇子智仁(としひと)親王が豊臣秀吉の猶子となって、別業を京都桂村に営み、文化七年(一八一〇)九月、光格天皇の皇子盛仁(たけひと)親王が九代を相続して、桂宮を称した。明治一四年(一八八一)淑子(すみこ)内親王が薨去ののち、家司職以下を解き、宮家の号は宮内省に預けられた。また、桂村の別業は離宮とされた。八条宮。常磐井宮。京極宮。 発音〈標ア〉⓪

かつらのみや-ずもう :ずまふ【桂宮相撲】〖名〗京都の六条西の洞院にあった桂の宮で行なわれた相撲。陰暦九月八日に行なわれたという。《季・秋》＊拾芥抄-中・年中行事部・九月〈略〉八日 桂宮相撲」＊俳諧・増山の井-九月「桂の宮相撲 八日 かつらの宮は六条の北面の洞院の西一町也」

かつら-は 【桂派】〖名〗金工の流派の一つ。横谷宗与の門弟、桂永寿を祖とし、江戸中期から後期に栄えた。この派では永寿の養子となった水戸の桂宗隣が知られる。 発音〈標ア〉⓪

かつら-はぎ 【桂剝】〖名〗「かつらむき(桂剝)」に同じ。

かつら-はちまき 【鬘鉢巻】〖名〗(「かづらはちまき」とも)「かつらおび(鬘帯)②」に同じ。＊楽屋図会拾遺-下「鬘鉢巻(カツラハチマキ)。巴御前あるひは山姥富士の方などのはちまき也」 発音〈標ア〉ヲ

かつら-はま 【桂浜】高知市南部の海岸。浦戸湾の門戸にあたる龍頭(りゅうず)岬の西側にあり、五色の珪石砂のひろがる景勝地。 発音〈標ア〉ヲ

かつら-はめ 【鬘嵌】〖名〗(「かづらはめ」とも) 鬘③を頭にかぶせること。＊歌舞伎・曾我梅菊念力弦-四立「禿頭と覚えましたが、今日は大分立派でござるが、〈略〉役者衆に借りたやら、鬘(カツラ)はめと見えます」

かつらばら-しんのう :シンワウ【葛原親王】(「かづらはらしんのう」とも) 桓武天皇の第三皇子。桓武平氏の祖。式部卿、常陸太守を経て、大宰帥(だざいのそつ)。天長二年(八二五)平朝臣の姓を許され、臣籍に下る。延暦五～仁寿三年(七八六～八五三) 発音カツラバラシンノー〈標ア〉ノ

かつら-ひげ 【鬘髭】〖名〗(「かづらひげ」とも) ①鬘②をつけたように、ふさふさと濃く生えている頬髭。面づら髭。＊源氏-椎本「御うつり香もてさわがれし宿直人ぞ、かつらひげとかいふつらつき、心づきなくてある」＊宇治拾遺-一一・八「年四十余斗なる男の、かつらひげなるが、〈略〉山吹の絹の衫(かざみ)よく

さらされたる着たるが」＊俳諧・本朝文選―五・序類・番椒序〈野坡〉「大かたはかづら髭つり髭の益雄（ますら）をにかしづかれて」②（「ずらかる」の音順を変えた「かずらる」の略からの連想による語）逃走することをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

かつらひし【桂菱】〖名〗鳥「さかつらがん（酒面雁）」の異名。＊重訂本草綱目啓蒙―四三・水禽「雁〈略〉一種さかつらひし一名さかつら 仙台、かづらひし 濃州」

かつらひと【桂人】〖名〗（「かつらびと」とも）山城国（京都府）桂の里の人。＊新撰六帖―三「この川に小夜更（ふ）けぬらしかつら人鵜縄手にまき船くだす也〈藤原光俊〉」＊玉葉―夏・三七九「かつら人月の光のさやけさ夜ものぼる鵜舟に棹は取るらし〈藤原実兼〉」

かつらひねり【鬘捻】〖名〗（「かづらひねり」とも）毛髪をひねりつないで、鬘②をつくること。また、その職人。＊三十二番職人歌合―五番「鬘捻。花鬘おち髪ならばひろひ置きひねりつぎても売らまし物を」＊随筆・嬉遊笑覧―一下「職人図彙におちゃないは都の西常盤といふ処より出るとかや、女の頭に袋をいただき髪の落をかひかもじにして売買世渡るわざとす。〈略〉是古へのかづら捻りと同じ」

かつらひめ【桂姫】〖名〗「かつらめ（桂女①）」に同じ。＊歌舞伎・幼稚子敵討―口明「大坂表疱瘡安産の守りを出さっしゃる桂姫様の事でござりませう」＊雑俳・柳多留―四〇「さし汐に参内をするかつら姫」＊随筆・一話一言―一二「桂姫一人、毎年始、八朔、所司代へ御礼として来る。扇子一台上るなり。目見有之鳥目一貫文下さる」

かつらひも【桂紐】〖名〗（「かづらひも」とも）「かつらまき（桂巻）」に同じ。

かつらぶね【桂船】〖名〗山城国（京都府）の桂川を通う船。＊為尹千首―春「霞みてもそれは見えつるかつら舟川島めぐる程や消ゆらん」

かつらぼうひん〖名〗（「かづらぼうひん」とも）ヤマノイモをいう、盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕

かつらまき【桂巻】〖名〗室町時代、長い布で鉢巻きのように頭部を包み、前で結んで下げたもの。京都桂女（かつらめ）風俗からはじまる。多く、庶民の女子の風俗。桂包み。桂紐（かつらひも）。鬘帯（かつらおび）。＊俳諧・桜川―冬二「鯨にかつらまきといふあれば、鯨突つなや正木のかつらまき〈不入〉」

桂巻〈福富草紙〉

かつらむき【桂剝】〖名〗大根、胡瓜など、五―六センチ巾の輪切りにしたものを、中心に向かって渦巻状に薄くむいて長い帯状にするむき方。かつらはぎ。

かつらめ【桂女】〖名〗①巫女（みこ）の一種。山城国（京都府）葛野郡桂村に住み、伏見の御香宮（ごこうのみや）に属し、石清水八幡宮にも仕えた。中古、諸家の祝事に訪れて祝言の祓をしたり、女系相続の制度を明治初年まで続けていた。桂姫。②山城国（京都府）桂の里の女。桂川の鮎や桂飴を京都の町で売り歩いた。桂乙女。＊頼政集―上「かつらめや新枕する夜な夜なは取られし鮎の今夜取られぬ」＊東北院職人歌合―一一番「桂女。〈略〉恋ひわびて瀬に臥す鮎の打ちさびれ骨と皮とにやせなりにけり」＊随筆・一話一言―一二「桂女（かつらメ）毎年始、八朔、所司代へ御礼として三四人づつ来る。年始に飴、八朔に菓を上る」＊白羊宮〈薄田泣菫〉小雀と桂女「別れた人に会ひたさに、今日も野へ来た桂女（カツラメ）は、路の瑞樹（みづき）の葉がくれに」③山城国（京都府）桂の里から出た遊女。一説に桂巻（かつらまき）をした遊女ともいう。＊随筆・貞丈雑記―二「かつらとも桂女とも云は山城国桂の里より出る遊女也」④昔、貴人の婚礼の時、花嫁の供について行った女。古くは、賤女（はしため）などが山城木綿（やましろもめん）を鬘（かつら）にしたところからという。＊譬喩尽―二「桂女（カツラメ）新歌也。かつらをんなもあるやらん、或書に桂女とて嫁入に籤（しめ）を執て新婦に従行女を云と」＊随筆・春湊浪話―二「今の世に婚礼の時に桂女といふものを供に供す。是は鬘女といふを桂女と誤れる事にや」古辞書書言

かつらもの【鬘物】〖名〗⇨かずらもの（鬘物）

かつらゆう　：ゆふ【鬘木綿】〖名〗（「かづらゆう」とも）鬘①に用いるもめん。＊延喜式―五・神祇・斎宮寮「凡斎内親王在京潔斎三年〈略〉参入斎殿、遙拝太神、時先供二御麻一次鬘木綿、其料安芸木綿四両、麻二斤」＊和訓栞―かつらゆふ 鬘木綿也〈略〉今猿楽の女の形に金襴などにて額をゆふは、此意風成べしといへり」

かつらりきゅう【桂離宮】京都市右京区にある離宮。正親町（おおぎまち）天皇の皇孫桂宮の別邸として元和六年（一六二〇）頃創建。古書院、中書院、新書院と庭園からなり、月波楼、松琴亭、笑意軒、園林堂などの茶亭が点在。日本建築と庭園の独自の美しさを示し海外にも知られる。明治一四年（一八八一）以後宮内庁所管。発音カツラリキュー〈標ア〉〔リ〕〈京ア〉〔リ〕

かつらん〖名〗承知、認知をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

かつり　クヮツ：【活理】〖名〗実際に活用できる道理、または論理。＊開化のはなし―辻弘想序「頗る寓言に渉ると雖も、論する所活理有て存す」

かつり【割離】〖名〗人と人、国と国などの間を割き互いに仲が悪くなるようにすること。＊日本外史―七・足利氏正記「自秉二旧勲一割二離親戚一、公亦何忍也」＊近世紀聞―染崎延房〈三・二「長州の声威を嫉み又随って其間を割離（カツリ）〈注〉サキハナス）なさんと計るもあれば」＊経国美談―〈矢野龍渓〉後・一四「今日の斯波多人民夫れ将た何の故を以て敝邦齊武を他の十二邦と割離せんと欲するか」

かつーり【黠吏】〖名〗不正をはたらく役人。奸吏（かんり）。＊明六雑誌―三八号・転換蝶鉸説〈阪谷素〉「北海道開拓黠吏姦民の土人を愚弄し」＊漢書―尹翁帰伝「県皆収取黠吏豪民、案致二其罪一高至二於死一」

かつーり【黠虜】〖名〗ずるがしこい外国の民。いやしい未開の蛮人。＊本朝文粋―二・応二討平将門符一尾張言騨〉「官軍黠虜之間、豈無二憂一国之士一乎」＊佳人之奇遇―東海散士〉一一「中華の言辞を解し、甘んじて黠虜（カツリョ）の奴となり」＊後漢書―伏湛伝「漁陽之地、逼二接北狄一、黠虜困迫、必求二其助一」

がつーりょう　グヮツリャウ【月令】〖名〗月々に行なわれる政事や儀式などを記録したもの。特に、「礼記」の月令篇を「がつりょう」と読みならわすところから、それをさすことが多い。げつれい。＊読本・椿説弓張月―続・拾遺考証「抑（そもそも）彼国は、北極を出ること二十六度二分三厘。暖気他国に勝れて、正月に桃の花開（さき）、桃杷熟（みのり）十二月に氷なく、蚊声を収（おさめ）ず、と伝信録月令（グヮツレウ）の条下（くだり）に見えたり」＊礼記疏―月令「名二曰月令一者、以二其記二十二月政之所一行也」

かつーりょく　クヮツ：【活力】〖名〗活動のもとになる力。生命力。また、生活する力。＊改正増補和英語林集成「Kwatsuryoku クヮツリョク 活力」＊それから〈夏目漱石〉一一「其時彼は自分ながら自分の活力（クヮツリョク）に充実してゐない事に気がつく」＊土〈長塚節〉六・草や木が心づいて其の活力を存分に発揮するのを見ないうちは鳴くことを止めまいと努める」＊或る女〈有島武郎〉前・一一「海から来る一種の力が体の隅々まで行き亘って、うづうづする程な活力を感じさせた」発音〈標ア〉〔ツ〕〔0〕〈京ア〉〔カ〕

かつりょくーせつ　クヮツリョク：【活力説】〖名〗生命には物理や化学の法則だけでは説明できない特別な原理としての活力があるという説。生気説。

かつーりん　クヮツ：【活鱗】〖名〗生きた魚。＊白居易―題海図屏風詩「万里無二活鱗一百川多二倒流一」

がつーりん　グヮツ：【月輪】〖名〗「がちりん（月輪）」に同じ。

がつりんーじ　グヮツリン：【月輪寺】京都市右京区にある天台宗の寺。山号鎌倉山。天応元年（七八一）慶俊の創建。関白九条兼実が蟄居（ちっきょ）した所として知られる。発音〈標ア〉〔ツ〕〈京ア〉〔リ〕

かつーるい【葛藟】〖名〗（「葛」はくず、「藟」はふじかずらの意）つる草の類を総称していう。＊三国伝記―一〇・一二「老檜枝を交へ、葛藟（カツルイ）蔓を垂れ」＊詩経―周南・穆木「南有二樛木一、葛藟纍之」

かつれ〖名〗方言春の朝など遠くの山がぼんやりとする現象。かすみ。山口県豊浦郡769 壱岐047 愛媛県松山832

かつーれい【割礼】〖名〗男女の生殖器の一部を切開する習俗。特に、男性の陰茎の包皮を切ることで、出生直後に行なう民族もあるが、思春期頃に行なわれるのが普通。古来ユダヤ教の儀式として有名。＊改正増補和英語林集成「Katsurei カツレイ 割礼」＊引照旧新約聖書―創世記・一七「神またアブラハムに言たまひけるは、〈略〉汝等の中の男子は咸（みな）割礼（カツレイ）を受べし〈略〉汝等其陽の皮を割（きる）べし是我と汝等の間の契約の徴（しるし）なり」発音カツレイ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉〔0〕

かつーれき　クヮツ：【活歴】〖名〗明治初期から中期にかけての演劇で、在来の時代物の荒唐無稽を排し、史実を重んじて歴史上の風俗をそのままに現わそうとした演出様式のもの。依田学海、九代目市川団十郎らが主張し、河竹黙阿弥、福地桜痴らの協力によって実現された。この語は仮名垣魯文が嘲笑的に用いた「活歴史」という言葉による。代表作に「伊勢三郎」「春日局」など。＊劇場改良法〈中村善平編〉演劇改良会の創立をきいて卑見を述ぶ「如何いふ演劇風（しばゐかぜ）の吹回しにや活歴（クヮツレキ）々々といふ事が流行（はやっ）て、別して近年は其沙汰が烈しく」発音〈標ア〉〔0〕

かつれきーげき　クヮツレキ：【活歴劇】〖名〗歌舞伎狂言のうち、活歴の演出による時代物。発音カツレキゲキ〈標ア〉〔平〕

かつれきーもの　クヮツレキ：【活歴物】〖名〗歌舞伎狂言のうち、明治期に初演された史実に忠実な脚本の総称。発音〈標ア〉〔0〕〈京ア〉〔0〕

かつーれつ【割裂】〖名〗分割すること。割れ裂けること。＊授業編―六「ただ一部の左伝を割裂（カッレツ）するを主とする」＊後漢書―文苑伝・杜篤「深之二匈奴一割二裂王庭一、席二巻漠北一叩二勒祁連一」

カツレツ〖名〗（cutlet）牛、豚、鶏などの肉に小麦粉、とき卵、パン粉を順につけて衣を作り、油で揚げた料理。カツ。＊内地雑居未来之夢〈坪内逍遙〉五「『カテレツ』の一皿だけは」＊時間〈横光利一〉「町へ着いたらだい一番にかつれつを食べるんだ」＊冬の宿〈阿部知二〉一四「焼鳥がある。脂臭いカツレツが揚ってゐる」発音〈標ア〉〔0〕〈京ア〉〔0〕

かつ・れる【飢・餓】〖自ラ下一〗「かつえる（飢）」の変化した語。＊倭語類解―飲食「飢 ウェル 又云 kja-ju-ryai-ru（カツレル）」方言青森県川 仙台115 宮城県石巻147 秋田県鹿角郡156 佐渡403 富山県礪波436 奈良県664 島根県715 徳島県803 愛媛県831 対馬933 長崎県五島日島936〈かつる〉熊本県947

かつれる【動】方言空がかすみわたる。かすむ。「山がかつれた」石見701 山口県柳井771 愛媛県宇和島839

がつ・れる【他ラ下一】いっしょに連れていく。供に連れる。はじめ、人形浄瑠璃の楽屋で使われていた隠語の一つで、上方の遊里などを通して江戸へ伝わ

ったといわれる。＊滑稽本・劇場粋言幕之外-下「こっぱり(目)片せぶりのがり(娘)をがつれ(連)たわこざ(女房)はつない(見)だをか(顔)だの」＊滑稽本・浮世床-二・上「がんどまへびき(武士)をがつれ(供につれた)、りゃうたつ(惣髪)のびんこう(男)がぜけ(居)て」

かつれん-せき【褐簾石】《名》緑簾(りょくれん)石の一種。褐色ないし黒色で半透明または不透明の亜金属光沢をもつ。単斜晶系。柱状または塊状結晶。酸性火成岩中の副成分鉱物として、またはペグマタイト中に産出。発音(標)ア レ

かつ-ろ【活路】《名》①苦難を切り抜けて、生きのびることのできるみち。窮地からのがれ出る方法。＊正法眼蔵-三十七品菩提分法「さらに仏法の活路なし〈略〉さらに分別の光明あらざるなり」＊太平記-三九・光厳院禅定法皇行脚御事「柱杖頭辺活路(クヮツロ)通ずと、中峯和尚の作られし送行の偈(げ)、誠に由ありと」＊読本・椿説弓張月-後・二〇回「活路(クヮツロ)の便宜に至るまでよく考(かうがへ)、すはといはば為朝御父子の御供して、はっちょう、廬が嶋までも、落しまゐらすべしと」＊牛肉と馬鈴薯-国木田独歩〈往々にして生命そのものに倦むことがある、斯る場合に恋に出遇ふ時は初めて一方の活路(クヮツロ)を得る」②生活するためのてだて。生活の方法。＊花柳春話〈織田純一郎訳〉四五「余の活路(クヮツロ)を塞ぎ立身を妨ぐる者は、此の児に非ずして誰そや」＊改正増補和英語林集成「Kwatsuro クヮツロ 活路〈訳〉生計。生活する方法。kwatsuro(クヮツロ)ニ クルシム」＊続俳諧師〈高浜虚子〉三九「一日も早く衣食の道を見出さねばならぬ〈略〉其結果此頃になって漸く一条の活路を見出した。それは或事業に携はることであった」発音(標)ア 余ア

かつろ を開く「切り開く」苦難からのがれ出る道や方法を見いだす。＊近世紀聞〈条崎延房〉五・三「奮戦なして一方の巓(やが)て活路(クヮツロ)を砍(キ)り開(ヒラ)き逃れ去しもありしかば」＊琴のそら音〈夏目漱石〉「ええ、少し其、用があって近所迄来たのですから』と漸く一方に活路を開く」

かつ-ろ【桔楼】《名》(「かつろう」とも)植物「きからすうり(黄烏瓜)」の漢名。＊文明本節用集「瓠瓜 カラスウリ 或云桔楼(クヮツロ)」＊薬品手引草「桔楼(クヮツロウ)瓜蔞(くはろ)からすうり 和菜」古辞書・色葉・文明

かつ-ろん【勝論】《名》(カツシュラ Vaiśeṣika の訳)インド六派哲学の一派。概念に対応する存在すべてを実在とみなし、これを六句義と呼ぶ六つの範疇に分類して、世界の現象を説明する唯物論的思想。カナーダ(一名ウルーカ)によって創始された。

ガツン-こ【一湖】(ガットゥンはGatun)《ガトゥン湖》中央アメリカのパナマにある人造湖。パナマ運河の開削でチャグレス川がせき止められてできた。運河の水路の一部となっている。発音(標)ア ツ

かつんぼう【名】方言樹木、ぬるで(白膠木)。埼玉県入間郡248 東京都西多摩郡044 神奈川県津久井郡286

かて【糧】《名》(動詞「かてる(糧)」の連用形の名詞化)①混ぜものをすること。また、混ぜ加える食物。＊随筆・折たく柴の記-上「麦飯にかてといふものいれしを、わかちてもてなす」②米に麦や大根、豆類などを混ぜ加えて炊いたもの。かてめし。かていい。＊志不可起〈かて〉略〈今関東の田夫(たみ)の飯にさまざまの野菜を雑るをかてと云」＊読本・南総里見八犬伝-八・七四回「然(さ)しも他郷に異なるは、糧食(カテ)にはあらで米の飯(いひ)＊安愚楽鍋〈仮名垣魯文〉初「南京米(なんきんめ)へとかての飯(めし)は喰(く)ったことがねへ男だ」方言①主食の米に加え混ぜて量を増すための野菜など。「大根でも菜っ葉でもかてに入れろ」青森県津軽115 宮城県148 山形県村山166 栃木県塩谷郡209 埼玉県秩父242 新潟県429 ②混ぜもの。「この餡(あん)は小豆ばかりでなくかてが入っている」青森県津軽115 宮城県148 ③うどん、そばなどに添えて食べる茹(ゆ)でた野菜など。栃木県安蘇郡213 群馬県館林239 埼玉県秩父242 神奈川県津久井郡286 ④食事のたしや生活費のたしなど。補い。「かてにして下さい」神奈川県中郡289 ⑤おまけ。長崎県南高来郡千々石925 ⑥葬式の時に出す酒食。鹿児島県徳之島993 発音(標)ア 方 余ア 方

かて【糧・粮】《名》①旅行などに携帯した食料。糒(ほしいい)の類。かりて。＊十巻本和名抄-四「粮 考声切韻云糧〈音涼 字亦作粮 賀天〉行所賚米也 又云儲食也」＊竹取「ある時にはかてつきて草のねをくひ物としき」＊宇津保-忠こそ「弟子三人、どうじ五人つれてありけるが、かてたえて」②食料。糧食。＊書紀-神武即位前乙卯年(熱田本訓)「三年を積(ふる)る間に、舟楫を脩(そろ)へ、兵食(カテ)を蓄(そな)へ」＊方丈記「かてともしければ、おろそかなる報をあまくす」＊名語記-四「くひものをかてとなつく如何。答かては粮也」＊天草本伊曾保-バストルの事「Cateni(カテニ) ツマッテ カイソダツル ヒツジヲ コロイテイノチヲツナイダ」＊浮世草子・新可笑記-四・三「けふを尋ぐべき糧(カテ)につくれば、馬の沓を作りて海辺の市にたつも是非なし」③(比喩的に)生活、成長していく上で、滋養分、ささえとなるもの。また、精神的なささえ。＊米沢本沙石集-五末・一六五「身後のまことの道の粮(カテ)をつつまざる事、静に思とくにかなしくこそ侍し」＊浮世草子・懐硯-二・一「既に財産も黄泉の旅の糧(カテ)にならず」＊竹沢先生と云ふ人長与善郎〉竹沢先生の散歩-六「あらゆる経験を成長の糧として、自家薬籠に取り入れ」語源説(1)カリテ(糧)の略「古事記伝・釐注和名抄・俚言集覧・頑鼠漫筆・和訓栞・大言海」。(2)カレヒアテ(乾飯当)の義「名言通」。(3)ケテ(食代)の義「言元梯」。(4)カはカシク(炊)、テは手、または、モテの上略か「和句解」。(5)クマタネの反「名語記」。(6)北の転声で、キタは勝の意「和語私臆鈔」。(7)カテテ加ヘテなどのカテルに同じで、穀物でない物を合わせて食べる意。それに「糧」の字をあてたため、白米一式の兵糧もカテというようになった「米櫃と糧と米=柳田国男」。

かて を敵(てき)に借る 敵の食料をうばってつかう。反対者をたくみに利用することにたとえていう。

かて【名】九州各地で、婚姻で結ばれた両家の相手方の家。また双方の親同士が相手をいう語。舅(しゅうと)、姑(しゅうとめ)などの意に使う。語源説加わる、結ばれる意のカタルと同語「綜合日本民俗語彙」。

かて【名】方言①山の非常にけわしい所。奈良県吉野郡669 ②山や岸のそばだった所。がけ。和歌山県那賀郡675 ③そば。かたわら。ふち。大阪府泉北郡644 和歌山県東牟婁郡675 ④山から木を切り出してふもとへおろす時、道から木材が外に出ないように道の両側に置いてある木。奈良県吉野郡672

かて 一【接助】上方語。活用語に付いて逆接条件を表わす。からとて。ても。かって。＊歌舞伎・敵討高音鼓-五「刀を出したかて、何の別に怖い事はないぞ」＊雑俳・玉の光「なむあみだ仏人待たすかて程がある」＊鰻の皮〈上司小剣〉五「福造の手紙なら読まんかて大概分ったるがな」二【副助】上方語。体言に付いて、「だって」「でさえも」の意を表わす。かって。＊太政官-上司小剣〉四「何処の銀行かてそんな廉い利息ちうたらあれへんがな」＊家族会議〈横光利一〉「僕かて、我慢に我慢を重ねて来たのや」方言でも。だって。「私かて知っとる」「言わんかてわかっとる」石川県能美郡453 福井県472 岐阜県揖斐郡602 滋賀県617 京都府041 大阪府638 兵庫県652 奈良県669 和歌山県676 愛媛県827

かて-ぐ【名】方言①桑の枝。群馬県多野郡240 ②葉を取り去った桑の枝。長野県下伊那郡050〈かてがら〉長野県下伊那郡050

がて【名】手紙をいう、盗人仲間の隠語。「隠語全集」

かて-てい【下底】《名》台形の平行な二辺のうち、下にあるもの。↕上底。発音カテイ〈標〉ア 〇

かて-てい【火底】《名》火の燃えるただ中。火中。＊太平記-二四・朝儀年中行事事「沈香火底(くわてい)に坐して筆を吹くと云ひぬる追儺の節会は今夜也」＊日葡辞書「Quatei(クヮテイ)。ヒノ ソコ。すなわち、ヒノ ウチヘ訳〉火の中」発音カテイ〈標〉ア 〇

かて-てい【仮定】《名》①(—する)一時的に国を平定すること。＊日本開化小史〈田口卯吉〉五・一〇「一時を仮定する豊臣氏の如くにして成らんより」②(—する)仮に想定すること。＊花間鶯〈末広鉄腸〉上・二「政党の真面目(しんめんもく)は此の如きものと仮定(カテイ)しますも」＊破戒〈島崎藤村〉一六・三「是がもし事実だと仮定すれば」＊草枕〈夏目漱石〉三「まあ一寸腹が立つと仮定する」③「かせつ(仮設)③」に同じ。発音カテイ〈標〉ア 〇 余ア 〇

かて-てい【花体】《名》はなやかな風情。＊三道「節懸(ふしかか)りによりて、働きに花体の見風あるべし」

かて-てい【花底】《名》花のもと。花下。＊落葉集「花底 くはてい」＊日葡辞書「Quatei(クヮテイ)。ハナノ ソコ」＊白居易-琵琶行「間関鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘」

かて-てい【花亭】《名》①花のそばにある亭(ちん)。美しく装いをこらしたあずまや。〈季・春〉＊和漢朗詠-上・三月尽「竹院に君閑かにして永日を銷すならん 花亭に我酔うて残んの春を送る〈白居易〉」＊吾妻鏡・建久四年一〇月一日「家督若公、渡二御江間殿新造花亭一」＊宴曲・宴曲集-二「花亭祝言」＊杜甫重題鄭氏東亭詩「華亭入翠微、秋日乱二清暉一」②仏語。灌仏会に設ける花御堂(はなみどう)のこと。＊禅林象器箋-器物・敕修清規仏降誕云、至二日庫司厳二設花亭一、中置二仏降生像一、於二香湯盆内一、安二小杓仏前一」

かて-てい【河底】《名》河の底。かわぞこ。＊西洋道中膝栗毛〈総生寛〉一四・上「龍動橋(ろんどんきゃう)の下流に河底(カテイ)を通じて」＊宋史-河渠志「徳州河底淤澱泄水稽滞、上流必至二壅遏一」発音カテイ〈標〉ア 〇 余ア 方

かて-てい【河堤】《名》河岸のつつみ。河の土手。＊翠山楼詩鈔-二編上「二山村晩眺「河堤支杖立、帰鳥入雲幽」

かて-てい【柯亭】《名》(後漢の人蔡邕(さいよう)が、浙江省の柯亭に宿泊した際に椽(たるき)の竹を取って笛に作り、宝物にしたという「後漢書-蔡邕伝」の注などに見える故事から)蔡邕が柯亭の椽の竹で作ったという笛の名器。転じて、笛のこと。＊続教訓鈔「白

川院の仰られしは、柯亭は〈今云長笛歟〉青竹葉二にもすぐれたり、玄上は比巴の王にこそあめれと云々。同仰に云く、柯亭は、三条関白の笛也」*増鏡「一〇-老のなみ「内の上、御笛、柯亭といふ物とかや。御箱に入たるを、忠世持てまゐれるを」補注「梁武帝-詠笛詩」に「柯亭有二奇竹一、含レ情復抑揚」と地名の例が見える。

かーてい クヮ：【科程】『名』課して行なわせる作業などの順序や程度。*灰燼〈森鷗外〉一〇「おみつで小学校の科程を踏んで来た子が、卒業証書だけ光太郎で受けた」*監獄法施行規則-六〇条「在監者に課する作業は其種類及ひ一日の科程を指定し之を本人に告知す可し」発音カテイ〈標ア〉〔0〕

かーてい 【家丁】『名』召使いの男。しもべ。下男。*万国公法〈西周訳〉四・四「其家丁と雖も号衣を被る者は〈略〉家丁は主簿使丁御夫等の如し」*蘆城平話「近因二大工肇興一採二取黄山木一植、養二春胆一敢遣二家丁文節一到レ京打点、停二寝採木一旨意」

かーてい 【家弟】『名』他人に対して自分の弟をいう語。舎弟。*書言字考節用集-四「家弟 カテイ 又云舎弟」*東西南北〈与謝野鉄幹〉「家弟と共に、東郊に歩す」*武蔵野〈国木田独歩〉七「家弟をつれて多摩川の方へ遠足したときに」*旧唐書-温大雅「大雅曰、若得二家弟永康一、我将二含一笑入一レ地」古辞書書言

かーてい 【家庭】『名』①一家の内。また、家族。*新聞雑誌-二三号・明治四年一二月「新に教方を創(はじ)め是を家庭に試るに」*王僧孺-詹事徐府君集序「事顕二家庭一、声著二同族一」②夫婦、親子を中心にした血縁者の生活する最も小さな社会集団。また、その生活の場所。*金色夜叉〈尾崎紅葉〉続・三「其故に彼は漸く家庭の楽からざるをも感ずるにあらずや」*手紙雑誌-一・八号・広大なるホーム〈小島烏水〉「前略、家庭と言ふ当節殊に流行の新語は、初め誰かが英語のホームを訳したのなりとか承はり候へ共、気の故か、ホームといふと、世間が広くなり、家庭といふと、頓にせせこましくて」*今年竹-里見弴〈二夫婦・一〉「遊びもいいが、家庭は壊すなよ」③屋敷内の、建物の前。家の庭。*田氏家集-下・夏日竹下命小飲「家庭養二緑尋常酔一、応レ是他生作二七賢一」発音カテイ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉〔0〕

かていを作る 結婚して一家を構える。*灰燼〈森鷗外〉二「まだ二十に足らない節蔵は、家庭を作るなんぞと云ふことは、遠い、遠い未来に属するやうに感じてゐるので」

かーてい クヮ：【過程】『名』①物事の生成、変化、発展の進行しつつある様相。また、経過する一連の道すじや現象をいう。*改訂増補哲学字彙「Process 暦間、過程」*妄想〈森鷗外〉「己を世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて」*明暗〈夏目漱石〉一三三「夫人の本意に到着する想像上の過程(クヮテイ)を描き出す事さへ彼には困難な位新らしいものであった」②物事の、連関的で合法的な進行。発音カテイ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉力

かーてい クヮ：【禍梯】『名』わざわいに近づいてゆく段階。わざわいのもと。*史記-趙世家「毋レ為二恐府一、毋レ為二禍梯一」

かーてい クヮ：【課丁】『名』律令制で課役を負担する男子。正丁(しょうてい)(二一～六〇歳)、中男(ちゅうなん)(一七～二〇歳)および老丁(六一～六五歳)、残疾(不具者・病人)がこれにあたる。ただし、天平宝字元年(七五七)に正丁、中男の年齢を一年ずつ引き上げ、翌年老丁の年齢を一年引き下げて課役負担者の範囲を縮小した。よぼろ。→課口。*令義解-考課・国郡司条「増二戸、謂レ増二課丁一、率二丁同二戸法一、毎二次丁二口、中男四口、不課口六口一各同二丁例一」*三代格-七・元慶四年一一月五日・太政官符「分二置件郡一即管郷六、戸二百九十七、課丁二千三百六、備二進調庸一出二挙官稲一」

かーてい クヮ：【課程】『名』学校などで、ある一定期間に割り当てて行なわせる、学習・作業の範囲。また、大学などにおける、教授・研究のための専門別コース。*経国美談〈矢野龍渓〉前・一「斜陽西嶺に傾き今日の課程も終りしにや衆多の児童は皆々帰りける跡に」*思出の記〈徳富蘆花〉二・五「塾の課程は漢文が十の八九を占め」*雁〈森鷗外〉一六「九月になって、大学の課程(クヮテイ)が始まるので」*唐書-百官志一「勲賜贓贖、徒役課程」発音カテイ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉〔0〕

かてい 【嘉禎】鎌倉前期、四条天皇の代の年号。天変地異により文暦(ぶんりゃく)二年(一二三五)九月一九日改元。嘉禎四年一一月二三日、暦仁(りゃくにん)と改元。将軍藤原頼経、執権北条泰時の時代。出典は「北齊書」の「蘊二千祀一彰二明嘉禎一」。発音カテイ〈標ア〉力

かてい クヮテイ【和亭】(幕末、明治の日本画家) ⇨たきかてい(滝和亭)

がーてい 【駕ヘ】『名』「かごかき(駕籠舁)」に同じ。

かてーい ：いひ【採飯】『名』「かてめし(採飯)」に同じ。*今昔-五・二二「王の御(おは)する時には白飯(しろきいひ)を与へ、王の御せざる時には粮飯(かていひ)を与ふ」古辞書書言

かていえんげい ：エンゲイ【家庭園芸】『名』農家以外の、一般家庭で野菜、果物、草花などを栽培すること。発音カテイエンゲイ〈標ア〉〔1〕〈京ア〉㊀

かていか ：クヮ【家庭科】『名』小・中・高等学校の教科の一つ。家庭生活に必要な知識、技能、態度を習得させることを目標としている。昭和二二年(一九四七)以降、中学校では技術・家庭科とし、そのうち、家庭科は女子を対象に指導する。高等学校では家庭科として女子だけを対象に指導する。発音カテイカ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉㊀

かていきょういく ：ケゥイク【家庭教育】『名』家庭で行なわれる教育。学校教育の系統的計画的な教育に対し、散発的臨場的で一貫性を欠くものの、心情や人格性に深く根ざした多様な教育が行なわれるところに特色がある。*一兵卒の銃殺〈田山花袋〉三二「『家庭がわりいんだ略』と言って、家庭教育のなほざりに出来ないことを話した」*教育基本法-七条・一「家庭教育及び勤労の場所その他社会において行われる教育は」発音カテイキョーイク〈標ア〉十一〈京ア〉十一

かていきょうし ：ケゥシ【家庭教師】『名』児童・生徒を家庭など私的な場所で個人的に指導する者。主として学校教育の予習・復習や受験などのために行なわれ、学生の副業となっていることが多い。*社会百面相〈内田魯庵〉女学者・下「華族や素封家の内教師は楽で加之(おまけ)に手当が宜いさうだけれども〈略〉家庭教師の口よりは求婚の案内を出して見やうか」*それから〈夏目漱石〉五「米国婦人を家庭教師に雇って、英語を使ふ事を研究した、ある物持ちの娘である」*生活の探求〈島木健作〉一・五「駿介のために家庭教師の口を世話し、駿介はどうにかその後一年余りの学生生活を続けることが出来た」発音カテイキョーシ〈標ア〉十一〈京ア〉十一

かていけい 【仮定形】『名』文法用語。活用形の一つ。口語の用言、助動詞の語尾変化の第五段。形容動詞または若干の助動詞を除いては、文中単独で用いられず、接続助詞「ば」を添えて、まだ成立しない条件を仮定し、または条件の成り立つものと仮定する形。「読めば」「美しければ」「静かなら」「行ったら」の「読め」「美しけれ」「静かなら」「たら」の類。文語の已然形から転じて成立したもの。この機能は文語では未然形が果たす。*日本口語法〈古岡郷甫〉「五段・カ行変格・サ行変格活用動詞の第四活用形、上一段・下一段の第三活用形は、『都に住めば見聞が広まる』『早く来ればよい』〈略〉『善く調べれば分る』の『住め』『来れ』〈略〉『調べれ』のように天爾乎波の『ば』が附いて、或事件を仮り定めていう形である。この形を仮定形という」発音カテイケイ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉㊃

かていけいざい 【家庭経済】『名』一家の経営に伴って生じる経済活動。また、一家の暮らしむきを切りまわして行くこと。家事経済。発音カテイケイザイ〈標ア〉力

かていげき 【家庭劇】一『名』家庭生活を主題にした演劇、映画、テレビドラマなど。二劇団「松竹家庭劇」が、大阪から東京に進出した当時呼ばれた名。発音カテイゲキ〈標ア〉〔0〕〈京ア〉㊃

かていさいばんしょ 【家庭裁判所】『名』家庭や少年に関する事件を専門に扱う下級裁判所。昭和二四年(一九四九)家事裁判所、少年審判所を統合して設置。地方裁判所と同格で、家事審判・調停を扱う家事審判部と、少年の保護事件を扱う少年審判部に分かれ、いずれも関係者間の話し合いによる解決を基本とする。発音カテイサイバンショ〈標ア〉〔0〕シ〈京ア〉〔0〕ニ

かていさいばんしょちょうさかん ：テウサクヮン【家庭裁判所調査官】『名』家庭裁判所の職員。医学、心理学、社会学、経済学などの専門の知識を活用して、家庭や少年に関する事件の事実調査や、保護処分の少年の観察、指導などを行なう。

かていしょうせつ ：セウセツ【家庭小説】『名』家庭の読者を対象とした健全な内容の小説。家庭向きの小説。明治三〇年代に流行。上流・中流社会における儒教的・キリスト教的家庭道徳と調和したものが多く、家族間の愛憎や道徳を多く題材としている。*文庫-明治三六年二月・浜子を読む〈小島烏水〉「一、本篇は『家庭小説』として些の猥気がなく、清新の二字を許すことを躊躇しない」*女夫波〈田口掬汀〉「はしがき「新しい読者に多少の感化を及ぼす便(よすが)にもならうから是非『家庭小説』の銘を打てとの要求がありましたので」発音カテイショーセツ〈標ア〉シ

かていじょうびやく ：ジャウビヤク【家庭常備薬】『名』救急用や簡易な治療のために、多くの家庭にいつも備えられているような薬。発音カテイジョービヤク〈標ア〉ビ

かていせいかつ ：セイクヮツ【家庭生活】『名』親子兄弟、夫婦などが、一つの家庭の中で暮らすこと。また、その暮らし。*雁〈森鷗外〉七「なぜ自分の家庭生活(カテイセイクヮツ)にかう云ふ味が出ないかと反省したり」*湖畔手記〈島西善蔵〉「家庭生活の苦しみも楽しみも知らぬ間に、家庭生活と云ふものに、すっかり幻滅し切ってゐた自分を」発音カテイセイカツ〈標ア〉ビ〈京ア〉セ

かていそうぎ ：サウギ【家庭争議】『名』家庭内のもめごと。家庭不和。発音カテイソーギ〈標ア〉ソ〈京ア〉ソ

かていちく 【柯亭竹】『名』中国、後漢の蔡邕(さいよう)が名笛を作ったという柯亭の椽(たるき)の竹。また、それから作った笛。発音カテイチク〈標ア〉チ

かていつうしん 【家庭通信】『名』学校が保護者に対し、児童・生徒の活動、状況などを知らせるもの。方法として、学校だより、文集、学業成績通知票、家庭連絡帳などがある。発音カテイツーシン〈標ア〉ツ

かていてき 【家庭的】『形動』①家庭生活をするのに適しているさま。家庭向きの。*虞美人草〈夏目漱石〉六「家庭的(カテイテキ)の婦女は家庭的の答へをする」*家〈島崎藤村〉下・七「叔母のような家庭的な人の口から」②家庭にいるようなうちとけた雰囲気であるさま。*別天地〈国木田独歩〉下・「艦(ふね)は彼等の家であるのだ。従って艦の内の生活には家庭的(カテイテキ)趣味を加へて来るのである」*黴〈徳田秋声〉六八「此病院が温かく家庭的に出来てゐるのが」*黯い潮〈井上靖〉一「久しぶりで家庭的な雰囲気の中に過して来た速水が」③小さくまとまっ

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

ているさま。こちんまりしているさま。＊満韓ところどころ〈夏目漱石〉四二「虫の音が聞えだした。足元で少しばかり鳴いている様な家庭的(カテイテキ)なものではない」 ④家庭に特に多く起こりうるような。家庭にありがちな。＊玄鶴山房〈芥川龍之介〉四「冷やかにこのありふれた家庭的(カテイテキ)悲劇を眺めてゐた」 発音 カテイテキ 標アク 京アク

かてい-どくほん 【家庭読本】『名』家庭向きの読み物。特に主婦や子どもに読ませる目的で書かれた教養書。 発音 カテイドクホン 標アク

かてい-ほう ：ハフ【仮定法】『名』①英文法の用語。動詞の法の一つ。その動詞の意味する事柄が、仮定ないし要望、願望である事を表わす動詞の形態。↓接続法。 ②算数の問題解法の一つ。未知の数を適当にきめて問題の数量関係をあてはめ、生ずる矛盾を比例関係に基づいて調整する方法。仮説法。 発音 カテイホー 標アク 京ア

かてい-ほうもん ：ハウモン【家庭訪問】『名』学級担任や家庭裁判所調査官などが、保護者の協力を得るためや家庭環境を知るために児童、生徒、少年の家庭を訪問すること。 発音 カテイホーモン 標アク 京ア

かてい-らん 【家庭欄】『名』新聞、雑誌などで、育児、衛生、料理、服飾、家計、園芸など家庭向きの記事を掲載する紙面。 発音 カテイラン 標アク 京ア

かてえ 『名』 方言 ①無理な事柄。「いくら何でもそれはかてえだ」栃木県安蘇郡206 長野県松本033 ②言いがかり。神奈川県津久井郡内郷286

かてえし 『名』 方言 ①椿(つばき)の実。佐賀県912 長崎県西彼杵郡高浜044 対馬豆酘932 壱岐島934 《かてし》大分県宇佐郡957 宮崎県西諸県郡961 ②椿の木。駿河021 《かてし》大分県一部024 宮崎県児湯郡036 鹿児島県971 ③椿油。長崎県西彼杵郡伊王島928

カテーテル 『名』(ﾄﾞｲﾂ Katheter) 体腔から液を排出するために用いる管状の器具。特に膀胱(ぼうこう)から尿を体外へ出すために尿道を経て挿入するもの。導尿管。消息子。＊随筆・夢之代-一二「小便閉を患ふるに小便を通ぜしむる器を『カテイテル』と云」＊イタリアの歌〈川端康成〉老妻は長年の看病の経験から、若い宿直医のカテエテルの道入振りを、上手だとか下手だとか文句をつけた」＊雪夫人絵図〈舟橋聖一〉二部・蝋の章「尿道へ、カテーテルを挿入するのまで、自分でやったさうだ」 発音 標アク 京ア

かてえり 『副』 方言 互いに。大分県日田郡957 宮崎県西臼杵郡椎葉960

かてえる 【飢】『動』 方言 飢える。ひもじがる。八丈島309 《かてる》青森県南部地方119

カテキズム 『名』(ﾗﾃ catechism) キリスト教信仰を、洗礼または堅信礼志願者あるいは子どもたちに教えるための書物。もともと口頭で教えたところから、文書となっても、問答体の形式をとるようになった。教理問答。信仰問答。カテキズモ。

カテキズモ 『名』(ｶﾀｷｽﾓ catechismo) 《カテキスモ》「カテキズム」に同じ。＊どちりいなきりしたん(一五九一年版)六「かてきずもに載(の)せたる事を読まるべし」＊どちりなきりしたん(一六〇〇年版)一「かてきずもといふ初談議(しょだんぎ)のことはりよりほかにもきりしたんのしらずしてかなはざる事おほきなり」

かてき-そんじゃ クッテキ：【化狄尊者・貨狄尊者】栃木県佐野市の龍江院に伝えられるオランダの人文学者エラスムスの木像。慶長五年(一六〇〇)漂着したオランダ船リーフデ号の船首飾りだったものを、中国で船の創造者といわれる化狄になぞらえて呼んだ。 発音 標アク

カテキュー 『名』(ﾗﾃ catechu) 植物染料の一種。カッチともいう。精製したものは阿仙薬(あせんやく)という。熱帯のアジア産植物のアカシア、ミモザ、アレカ、ウンカリアなどの幹や葉、果実を煮出して粉末とする。木綿、絹、羊毛などの褐色染めに用いられる。

かてーぐさ 【糧草】『名』植物「さんきらい(山帰来)」の異名。＊書言字考節用集-六「土茯苓 カテグサ 俗云山帰来」 古辞書書言

カテゴリー 『名』(ﾄﾞｲﾂ Kategorie, ﾗﾃ category) ①哲学で、事物を分類する際、もはやそれ以上に分けることのできない、最も根本的、一般的な基本概念(属性、量、状態、関係等)。最高の類概念。範疇(はんちゅう)。 ②一般に、同じ性質のものが属すべき範囲、部門。範疇。＊母子叙情〈岡本かの子〉「お母さんは余りに自分流のカテゴリーを信じようとしすぎるやうな気がします」 発音 標アク 京ア

かーでし 【蚊弟子】『名』遊芸の師匠のもとに、夏の間だけ夕方から集まって来て唸(うな)る弟子を、蚊にたとえていう語。＊木下長嘯子書状「蚊よめる 忍路のこへたてねども夕ぐれはつれなかでしや夜半の関守」

かてしーのき 【名】 方言 ①つばき(椿)。壱岐島934 ②さざんか(山茶花)。長崎県南高来郡三会926

かてしじょ 【名】 方言 ①舅(しゅうと)姑(しゅうとめ)。壱岐香椎934 ②嫁の里方の両親。鹿児島県肝属郡高山979

かてーぜめ 【糧攻】『名』食糧の尽きるのを待つ城攻めの法。兵糧(ひょうろう)攻め。＊雑俳・広原海-一「粮責や勇者の目には穀潰し」

かーてつ クッ：【火鉄】(名) 火のように赤く熱せられた鉄。＊日葡辞書「Quatet(クヮテツ)。ヒノ クロガネ」

かーてつ クッ：【瓜鉄】(名) 大うりと小うり。一説に、うりの蔓(つる)。転じて、血縁関係で連なっていること、子孫の繁栄することにたとえる。＊詩経-大雅・緜「緜緜瓜瓞、民之初生」

かてて 『接助』(「かとて」の変化した語) 動詞、形容詞、助動詞の連体形に付いて、逆接を表わす。…といったって…にしても。＊浄瑠璃・彦山権現誓助剣-三「母御によう似た伯母様が有るかてて、子供と云ふものはても扨も、扨も扨も」＊洒落本・短華藥葉-大意「おまへもけふは抜き花の弐本や三本はせぬかて大事ないかほぢゃもの」＊洒落本・十界和尚話-五「こちらのやうな者が馴染になったかてて、お前の為にはなりゃせまいし」

かてて-くわえて ：くはへて【糅加・搦加】『連語』(「かて」は、動詞「かてる(糅)」の連用形で、混ぜあわせるの意)あることの上にさらにことを加えて。さらにその上に。おまけに。ふつう望ましくない状態が重なるばあいに用いることが多い。＊浄瑠璃・女殺油地獄-中「かてて くはへておかちが煩ひ伯父の難儀、まだ此の上にどろめが何を為出さふやら」＊歌舞伎・傾城倭荘子-大序「エヽ、搦(カ)てて加(クハ)へて身請けの切端」＊滑稽本・浮世風呂-二「下「夫に又、かてて加(クハ)へて、妹のお糠が屋敷から病気で下がる」＊浮雲〈二葉亭四迷〉三・一四「搦(カ)てて加へて、朝の薄曇りが昼少し下る頃より雨となって、びしょびしょと降り出したので」＊婦系図〈泉鏡花〉前・二八「搦(カテ)て加へてお鳥の一件が暴露(ばれ)たため」 発音 標アク 京ア 京ア

かてて-まぜて 『連語』いろいろと、物事が混雑すること。＊浜荻(久留米)「かてて まぜて 色々と日用のことの混雑すること也。とりまぜて取雑也」 方言 かてつまぜつ)「仕事がいろいろあるが何を先にしようか実にかてつまぜつなことだ」対馬933

カテドラル 『名』(ﾗｼﾞ cathedrale) 英国教会やカトリック教会などの、司教の法座のある大聖堂。大寺院。 発音 標アク

かて-に 『連語』(補助動詞「かつ」の未然形に、打消の助動詞「ず」の上代に使われた連用形が付いたもの)動詞の連用形に付いて、…することができずに、…するにたえなくて、の意を表わす。＊万葉二・九五「吾はもや安見児得たり皆人の得(え)難爾(かてこ)すと云ふ安見児得たり〈藤原鎌足〉」＊万葉三・二五三「稲日野も行き過ぎ勝爾(かてこ)思へれば心恋しき可古の島見ゆ〈柿本人麻呂〉」＊万葉五・八四五「うぐひすの待ち迦豆爾(かてこ)せし梅が花散らずありこそ思ふ子がため〈門部石足〉」＊万葉一四・三三八「筑波嶺の嶺ろに霞み居過ぎ可提爾(かてこ)息づく君を率寝(ゐね)てやらさね〈東歌・常陸〉」 補注 「万葉二・九五」など、「かてに」の「かて」に「難」の字を用いているものは、「かて」に否定の意を含み、「に」を助詞と解したものと思われる。↓がてに②

がて-に 【糅】『連語』(「がて」は、動詞「かてる(糅)」の連用形の変化したもの)名詞の下に付いて、「まじりに」「まぜ合わされて」の意を表わす。＊享和本新撰字鏡「糲 有骨醨 骨加天爾豆久礼留肉醤」＊延喜廿一年京極御息所褒子歌合「雪がてに吹く春風は早けれど青山なれば寒からなくに」 古辞書字鏡

がて-に 『連語』①連語「かてに」の変化した語。 ②のような語構成として用いられたことも考えられる。＊万葉五・八五九「春されば我家(わぎへ)の里の川門(かはと)には鮎子(あゆこ)さ走る君待ち我伎爾(がテニ)〈大伴旅人〉」＊万葉一四・三四七〇「あひ見ては千年(ちとせ)や去(い)ぬる否(いな)をかも我やし か思(も)ふ君待ち我弖爾(がテニ)〈東歌・入麻呂歌集出〉」 ②(「難(かた)し」との語形の類似から、「かてに」に「…することに耐えない、できない」の意を含み、「に」を助詞と解したことによる)…できずに、…するに耐えないで。＊古今-雑下・九六四「うき世には門(かど)させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする〈平貞文〉」＊宇津保-俊蔭「七人、紅の涙を流して惜しむ。俊蔭行きがてにして帰る」＊源氏-蓬生「今宵も行き過ぎがてにとまらせ給へるを、いかが聞こえさせむ」＊浄瑠璃・伽羅先代萩-道行「操(あや)どるごとき細道を、分つつ来つつ行がてに、在(ざい)の女共が打まじり、中よさそふな連(つれ)ぶしに」 発音 倉史 上代すでに『かてに』形のほかに『がてに』形も見られる。鎌倉初には『がてに』形のみ。

かて-ぶくろ 【糧袋】『名』いくさの時に兵糧(ひょうろう)を入れる袋。兵士はこれを腰につける。

かてーみち 【名】(「むかでみち(百足道)」の略から)鉄道線路をいう。盗人・てきや仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

かてーめし 【糅飯】『名』(「かて」は混ぜる意)米が足りない時、米に麦、大根、豆類などを混ぜてたいた飯。かて。かていい。かてものめし。かしきがて。＊談義本・当世穴穿二・さがの釈伽もんどう「神道がよいとても両部の神道ではかて飯(メシ)をくふ様なもので」＊洒落本・残座訓「百姓はなを更麦菜も大かた喰つくし、今は麦二ぶに糠(ぬか)ふすまを八ぶのかてめし」＊南小泉村〈真山青果〉一「百姓ほどみじめなものは無い、取分け奥州の小百姓はそれが酷い、濫禳(ほろ)を着て糅飯(カテメシ)を食って、子供ばかり産んで居る」 方言 ①飯の量をふやすために雑穀や野菜などを混ぜてたいたもの。北海道11 岩手県130 宮城県148 新潟県424 飛騨155 ②野菜などを混ぜてたいた味つけ飯。ごもくめし。群馬県多野郡240 埼玉県秩父242 東京都南多摩郡279 神奈川県津久井郡285 語源説 カテメシ(合飯)の義。すなわち、米に、麦または野菜類などをカテた飯〈俗語考〉。 発音 倉史 カテミシ〔岩手〕

かて-もの 【糅物】『名』 方言 飯の副食物。おかず。青森県119 岩手県遠野131 秋田県鹿角郡157 群馬県吾妻郡219 山梨県510 静岡県磐田郡050 長野県南佐久郡044 宮崎県961 《かてもん》新潟県中魚沼郡423 熊本県947 宮崎県961 鹿児島県肝属郡044 《かてぃむん》琉球996

かてものーめし 【糅物飯】『名』「かてめし(糅飯)」に同じ。＊談義本・艶道通鑑-四・一〇「糧物飯(カテモノメシ)に青菜を喰ゆへ良(かお)はいつも木賊(とくさ)

色にして」

がてら『副助』動詞の連用形または体言を受け、「…をかねて」「かたがた」「ついでに」等の意を表わす。「がてら」の受けている動詞が意味的に従、下に続く動詞が主である。＊万葉一八・四〇四一「梅の花咲き散る園にわれ行かむ君が使をかた待ち我氏良(ガテラ)〈田辺福麻呂〉＊万葉一九・四一五六「吾妹子が形見我氏良(ガテラ)と紅の八塩に染めておこせたる衣の裾もとほりてぬれぬ〈大伴家持〉＊宇津保—嵯峨院「来年こそはつかまつり給べき年なれば、御子日(ねのひ)がてらも参り給ふかし」＊源氏—帚木「いかが思へると、気色も見がてら雪をうちはらひつつ」＊人情本・清談若緑—三・一三回「何ぞ吾儕(わたし)の身に、気に入らない事でもあって、面当(つらあて)がてらの事ならば、遠慮は入らぬ夫婦の仲、さて斯う斯うだと胸の中を、言って聞かせて下さいまし」＊家〈島崎藤村〉下・六「正太はその報告がてら、一寸復た三吉叔父の家へ寄った」補注この語の古い形と思われる上代の「がてり」が固定慣習化されるに従い、並列用法から修飾用法に変わり、状態性も深まり、ア列音に変化したものか。↓がてり。方言「歩きがてら話そう」神奈川県藤沢283《がつら》静岡県551 語源説

(1)ガテはカツ、カテテ(加・揉)の義。また、カツ(且)の転か(大言海)。(2)カテは行きがけなどのカケ(懸)。ラは助詞(類聚名物考)。(3)兼ねての義のカネラ(兼)から(俚言集覧)。(4)カタハラ(旁)の約(安斎随筆)。(5)ガテリの音便(日本古語大辞典=松岡静雄)。発音ガテラ(ママ)ガタラ〔紀州〕ガチラ〔島原方言〕ガツラ〔対馬〕ガツレ〔壱岐続〕《標ア》

がてら-じる『名』食事の時に菜を食べないで汁だけ食べること。＊俚言集覧「かてら汁 上方辺にて汁ばかりを喫して余の菜をまじへざるをガテラ汁と云」

がてら-ぼうこう『名』(「がてら」は「…を兼ねて」の意)妻と下女の役を兼ねて奉公すること。＊浄瑠璃・釜淵双級巴—中「何するすべも女(なこ)の手業(わざ)、せん方(はう)尽きて此家の奉公、五郎市は丁稚(でっち)ぶん。私(わし)はあの子を生んでから、まあ下女ぶんのがてら奉公(ボウコウ)」

かてり『名』方言仕事などを互いに手伝いあうこと。宮崎県966《かてりこ》長崎県五島044

がてり『副助』動詞の連用形を受け、「あわせて」「かねて」の意を表わす上代語。「がてら」より古い形。＊万葉一・八一「山の辺の御井を見我弖利(ガテリ)神風の伊勢少女ども相ひ見つるかも長田王〉＊万葉一〇・一九〇「梅の花咲き散る苑(その)に吾れ行かむ君が使をかた待ち香花光(ガテリ)作者未詳」＊万葉一七・三九四三「秋の田の穂向き見我氏里(ガテリ)わが背子がふさ手折りける女郎花かも〈大伴家持〉」補注(1)語源については、「まぜる」「合わせる」の意を表わす動詞「かつ」の連用形に「あり」が続き、音変化を起こして出来た語、と言われる。これが形容性を深めるに伴って形を変えたのが「がてら」である。『がてら』溯源=阪倉篤義)。(2)この語は、接続助詞として扱う人も多く、また、副詞構成の接尾語とする説もある。

か-てる【糅】『他タ下一』文か・つ『他タ下二』混ぜ合わせる。細かにきざんで混ぜる。＊書紀—推古三年四月(岩崎本訓)「沈木といふことを知らずして、薪に交(か)てて竈に焼(た)く」＊万葉一・六・三八二九「醤(ひしほ)酢に蒜(ひる)つき合(かて)て鯛願ふわれになまえそ水葱(なぎ)の羹(あつもの)〈長奥麻呂〉＊南海寄帰内法伝平安後期点—一「手をもて攪(か)き合せて和(カ)てて諸の助味を投る」＊色葉字類抄「和カツ 交也」＊壒嚢鈔—一「賤者の物を買とてかてて云は増する心歟。一向片言歟。非二増義一交ふる心也」＊浄瑠璃・新版歌祭文(お染久松)—座摩社「是はいかな糅(カテて)交(まぜ)てどんちゃんと。是もやっぱり今の願」方言①加える。神奈川県高座郡麻溝283 静岡県安倍郡井川「どんぐりの団子にそばをかてて作る041 長野県諏訪513 岐阜県加茂郡042 長崎県南高来郡有家「お前の頼んだ魚はどっさりかてて買ってきた041《かつる》壱岐、米に麦をかつる」934 熊本県951 ②仲間に加える。入れる。「おれもかててくれ」北海道函館039 青森県119 岩手県050 秋田県北秋田郡154 群馬県233 埼玉県秩父242 神奈川県283 伊豆大島304 新潟県418 福井県462 山梨県(組合にかてる)510 長野県532 静岡県563 愛知県八名郡569 対馬933《かつる》大分県956 ③混ぜる。混ぜ合わせる。新潟県西頸城郡428 ④子どもの守りをする。「晩まで子どもかてろ」青森県115 岩手県130 秋田県156《かたる》越後411 ⑤副食物にして食う。青森県113 秋田県鹿角郡157《かつる》宮崎県東諸県郡966 発音《ママ》カタル・カッル〔福岡〕カッチェル〔対馬〕カッツル〔壱岐〕《標ア》方 今史平安○《余ア》方 古辞書色葉

かてる『動』方言夫婦にする。めあわす。岩手県九戸郡122 新潟県中頸城郡妙高高原427

かてる『動』方言①井戸水などがかれる。富山県礪波437 石川県金沢449 ②凍る。滋賀県伊香郡日617

か-てんク：【火点】『名』小銃、機関銃などの兵器がそなえてある陣地。＊俘虜記〈大岡昇平〉「彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて」

か-てん【加点】『名』(一)①漢文文献を読む際、理解の助けとして句読・段・四声等を示す符号類を文献上に記入すること。また、その符号。広義には、発音を示す音注、語義を示す訓注、段落を要約する科文等の注記類を記入すること、またその注記をも含めていう。＊大英博物館蔵スタイン蒐集敦煌文献二五七七妙法蓮華経巻第八巻末識語「但是四字句者絶不加点」＊日葡辞書「Caten(カテン)。すなわち、テンヲ クワユル〈訳〉それによって別の読み方をするために、日本の文字にある点を加える」②文書に、確認、承諾の意を示すために┐印などの符号を加えること。また、その符号。加鉤。(二)或る点数にさらに点を加えること。発音《標ア》0

か-てん【加添】『名』加え添えること。加えて増すこと。添加。＊改訂増補哲学字彙「Cumulation 累積、加添」＊白居易—白髪詩「加二添老気味一改二変旧容儀一」

か-てんク：【科点】『名』或る文章中の段落分けを示す点。段落の大旨、要約を記した注記を科文(かもん)という。＊天理図書館蔵大方広仏華厳経平安初期点—一八「貞観十九年三月一日一交了沙門儀遠、元慶三年二月六日指科点了、八月十二日二校々了」発音《標ア》0

か-てん【夏天】『名』夏の空。夏の天。夏の日。《季・夏》＊新撰万葉—上「夏天処々多撩乱。暁牖家々音不遙」＊本朝無題詩—二・石瀬之辺有釣漁人、濁醪満樽魚膾堆俎〈藤原周光〉「漁客夏天幾処留。瀬声清浅岸涼頭」＊十訓抄—一・秦始皇授位于松事「夏天に道行く人、木陰に涼みて衣をかけ」＊草応物・休暇東斎詩「岸幘偃二東斎一夏天清暁露」

か-てんク：【華顛】『名』白髪の頭。老人をたとえていう。白頭。華首。＊翰林胡蘆集—五・湖隠軒「今日杏花君不レ見、残僧数輩共華顛」＊新編覆醤続集—五・抒情三首其三「空窮二犬馬年一、頭魯到二華顛一」＊抱朴子—任命「六龍促二軌於大運一、華顛倏忽而告レ暮」

か-てん【歌天】『名』仏語。胎蔵界曼荼羅(まんだら)の西方楽天の左側、同じく北方楽那羅(きんなら)の北外側に位置する天部の名。

か-てん【歌典】『名』和歌の書物。

か-てん【嘉典】『名』婚礼などのめでたい儀式。祝典。嘉礼(かれい)。＊梁粛—立皇后孟氏制「嘉典大備、並行二今古之情一」

か-てん【嘉点】『名』山崎嘉右衛門(闇斎)が、四書を訓読するために施した訓点。＊授業編—三「又闇斎先生の訓点なりとて、世に嘉点と称する本あり。これは仮名すくなくてよけれども」

かてん【賀殿】雅楽。左方。壱越(いちこつ)調。新楽。四人舞。承和年間(八三四～八四八)遣唐使藤原貞敏が琵琶(びわ)曲で伝え、舞は林真倉(はやしのまくら)が作ったという。甘泉楽。嘉祥賀殿楽。＊扶桑略記—康保三年一〇月七日「殿上有二侍臣舞一、略〉次奉二賀殿、舞人兼通朝臣、親賢朝臣一＊紫式部日記—寛弘五年一〇月一六日「万歳楽、太平楽、かてんなどいふ舞ども」＊栄花—初花「むげに夜(よ)に入りぬれば万歳楽・太平楽・賀殿など舞ひ」

賀殿〈舞楽図譜 宮内庁書陵部蔵〉

か-てんク：【火天】(梵Agni の訳語)仏語。インド神話の火神から仏教に転入した仏法擁護の神。密教では、八天、十二天などの一つ。胎蔵界曼荼羅では外金剛部東南隅に列する。体は赤色、髪は白色。常に苦行仙人の形をして火炎中に座し、四本の手に、三角印、数珠(じゅず)、水瓶、仙杖を持つ。智火で煩悩(ぼんのう)を焼き尽くすという。火光尊。火仙。火神。＊今昔—三・二〇「此の犬は、汝が父兜調(とてう)が成りたるには非ずや。彼の兜調は火天〈くわてん〉を祭りて梵天を願ひしかども、犬の身と成て汝に養育せらるる也」＊曾我物語—六・弁才天の御事「くわてん猛火を放し、風天風を吹かせ、おのおの城を守り給ふ」＊謡曲・輪蔵「釈迦一代の蔵経を、昼夜に守護し奉る、十二天のその中に、火天これまで来りけり」＊大日経疏—五「東南隅右列二諸火天衆一住二火焔中一額及両臂各有二三灰画一即婆羅門用二三指一取レ灰、自塗二身象也。一切深赤色、当レ心有二三角印一在二焔火円中一左手持二数珠一右手持二澡瓶一」

か-てんク：【火田】『名』①(「田」は田猟で、狩のこと)田畑の草木を焼いて、狩をすること。＊礼記—王制「昆虫未レ蟄、不二以火一田」②朝鮮で行なわれる焼畑(やきはた)をいう。朝鮮の北部、蓋馬(けいま)高台に多く行なわれ、粟、大豆、馬鈴薯などが栽培される。＊和漢三才図会—五五「畾(はた)〈略〉火田 畑俗字、和名也以八太。唐韻云畾火田也。不レ耕而火種也。〈略〉按畾即火田(はた)也。山畠也」＊白居易—東南行一吏徴二魚戸税一人納二火田租一」

か-てんク：【瓜田】『名』①瓜(うり)の植えてある畑。うりばたけ。＊色葉字類抄「瓜田 クヮテン 履名」＊日葡辞書「Quaden(クヮデン)。ウリバタケ」＊陶潜—飲酒詩「邵生瓜田中 寧似東陵時」②「かでん(瓜田)に履(くつ)を納(い)れず」の略。＊雑俳・柳多留—二二「くわでんは元よりこたつもいましめる」発音《標ア》方0 余ア0

かでん に 履(くつ)を納(い)れず「納(おさ)めず」(古楽府「君子行」の「君子防二未然一、不レ処二嫌疑間一、瓜田不レ納レ履、李下不レ整レ冠」から出た語。瓜畑で、履が脱げても瓜を盗むかと疑われるのでかがんではき直すな、李(すもも)の木の下で冠をきちんと直せば李を取るかと疑われるので冠を正すなの意から)疑われやすい行為はするなというたとえ。李下(りか)に冠を整えず。瓜田の履。＊文明本節用集「瓜田不レ納レ履(クヮデンニハクツヲヲサメズ)李下不レ正レ冠〔文選〕」＊歌舞伎・月宴升毬栗(散切お富)—二幕「世の譬(たとへ)にもいふ通り、瓜田(クヮデン)に沓(クツ)を入(イ)れずとやら、仮令どのように衣類を濡らされたとて」＊古列女伝—斉威虞姫「経二瓜田一不レ納レ履、過二李下一不レ整レ冠」古辞書文明

かでん の 履(くつ) 「かでん(瓜田)に履を納れず」

に同じ。 発音〈標ア〉カツ 〈京ア〉カ＝ク

かてん 李下（りか）（「瓜田に履を納れず」「李下に冠を整えず」を合わせて略した語）疑われることはするなというたとえ。*捜神記-巻一五「懼ㇾ獲ニ瓜田李下之譏一」 古辞書書言

かーてん クヮ：【禾田】『名』（「禾」は穀物、特に稲の意）稲田。田。*性霊集-一・喜雨歌「禾田沃潤、堪ㇾ没ㇾ牛」

かーてん クヮ：【花田】『名』①（「はなだ（縹）」を「花田」と書いて音読した語）薄い藍色（あいいろ）。はなだいろ。*浄瑠璃・松風村雨束帯鑑-三「花田の直衣、太刀平緒うへの袴は着し給はず」*浄瑠璃・碁盤太平記「皆一様の花（クヮ）でんのはぎ」②花の咲いた田。*葉適-送包通判、兼寄滕季度詩「燈市暁侵ㇾ月 花田晩占ㇾ春」

かーてん クヮ：【花鈿】『名』花の形をした婦人の髪飾り。花釵（かさい）。はなかんざし。*白居易-長恨歌「花鈿委ㇾ地無ニ人収一翠翹金雀玉搔頭」

かーてん【家伝】『名』①その家に先祖代々伝わっていること。また、そのもの。相伝。*文明本節用集「家伝 カデン」*浄瑠璃・源氏冷泉節-下「軽（かろ）き症にてなし。某（それがし）家伝の名法有りと」*歌舞伎・お染久松色読販-中幕「お染へ持参の家伝の良薬」*和英語林集成（初版）「コノ クスリワ kaden（カデン）デ ゴザリマス」*陳書-江総伝「家伝賜書数千巻、総昼夜尋読、未ㇾ嘗輟ㇾ手」②相承される家の事績を記した書物。家に言い伝えられた事柄を編んだ書物。律令制では、功績のある家々の記録が式部省に集められて編集、保管されていた。*令集解-職員・式部省条「謂、有功之家、進ニ其家伝一省更撰修、釈伝、家伝書名也、仮如、三史列伝文類也、跡云、家伝、謂功臣之子孫嫡々相継状注置也、古記云、三位以上、或四位以下、五位以上、有ㇾ可ㇾ為ニ功臣一也、如ニ漢書伝一也」*謝霊運-山居賦「国史以載ニ前紀一、家伝以申ニ世譲一」 発音〈標ア〉〇 〈京ア〉カ 古辞書文明・書言

かーてん【荷電】『名』物体が帯びる静電気の量。電荷。 発音〈標ア〉〇 〈京ア〉〇

かーてん クヮ：【訛伝】『名』あやまって伝えること。また、まちがった言い伝え。誤伝。*読本-椿説弓張月-後二三〇回「浅原八郎為頼の悪霊を鎮（しづめ）祭れるなるべし。因に今ここに録せり。かかる訛伝（クヮテン）なほ多かり」*雪中梅〈末広鉄腸〉下-六「松田までも其の素生を知って、新聞の訛伝（クヮデン）ならぬことを保証せし程なれば」*小公子〈若松賤子訳〉一三「『華族の令嬢と結婚の約束が恰も調うた折から』などと訛伝（クヮデン）し」*紅楼夢-三三回「宝玉連説実在不ㇾ知、恐是訛伝也、未ㇾ見得一」

かーてん クヮ：【花伝】「かでんしょ（花伝書）❶」に同じ。

がーてん【合点】『名』（「がってん（合点）」の変化した語）①（―する）「がってん（合点）③」に同じ。*虎明本狂言・成上り「物のへんずると申す事は、目前にあって、がてんのまいらぬふしぎなことでござるぞ」*歌謡・姫小松-下-三味線手引草「此奥（おく）の弾様（やう）と見較（くら）べてがてんあるべし、その為（ため）のあいもんなり」*浄瑠璃・女殺油地獄-下「姉はよふいひ聞せたればがてんして」*俳諧・蕪村句集「秋来ぬと合点させたる嘘かな」②（―する）「がってん（合点）④」に同じ。*浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡-中「夕霧息もたへだへながら是源之介がてんしや」*浄瑠璃・寿の門松-中「命たすけよといふあてこと、がてんせぬおぬしでなし」*歌舞伎・幼稚子敵討-六「よふ物をがてんして見や」*当世書生気質〈坪内逍遙〉四「三味線胡弓、又は踊舞（おどり）をもならはしむるに、何をさせても合点（ガテン）早く」③「がってん（合点）⑤」に同じ。*俳諧・続猿蓑-上「しなぬ合点で煩ふて居る〈沾圃〉年々に屋うちの者と中悪く里圃〉」*浄瑠璃・博多小女郎波枕-上「ぜひ当年は請け出して、女房に持るるがてん持（もつ）約束と」*洒落本・陽台三略「まぶの男はがてん成事に候へば」 発音〈標ア〉カ 〈京ア〉カ

がてん がいく［＝ゆく］「がってん（合点）がいく」に同じ。*虎明本狂言・箕潜「是ほどにいふにがてんがゆかぬ」*浮世草子・好色一代男-七-三「世之介にあやかれと戴（いただか）せば、合点（カテン）かゆかぬと笑ふてゐる」*談義本・根無草-前-一「都（すべて）娑婆にて男色といへる事有よし。我甚だ合点（ガテン）ゆかず」*滑稽本・東海道中膝栗毛-五-上「それに今時分（じぶん）、なんぜこないな所。こりゃ合点（ガテン）がいかんわい」

がーてん グヮ：【画展】『名』絵画の展覧会。 発音〈標ア〉〇

がてん-いんすい【我田引水】『名』（自分の田に水を引き入れるの意から）自分の利益になるように考えたり、したりすること。手前勝手。わが田に水を引く。*思出の記〈徳富蘆花〉九-四「今日の急務は〈略〉先づ牧畜であって、愛国者は即ち牧畜家、牧畜家即ち救世主と言ふ様な夥しい我田引水説を唱へ」*竹沢先生と云ふ人長与善郎〉竹沢先生の人生観-五「愛知は大いに我田引水な油をかけた」 発音〈標ア〉カ〇 〈京ア〉カ〇

がてん-くび【合点首】『名』「がってんくび（合点首）」に同じ。*雑俳・武玉川-七「五月雨人形も皆がてん首」*随筆・嬉遊笑覧-六下「何事も得心するを合点といふ故うなづく事をしかいふなり。合点首は今もある首ばかりの人形なるべし」

かてんげっち クヮテン：【花天月地】『名』花は梢に咲き満ち、月は明々（あかあか）と地を照らす風景。すなわち、美しい春の月夜の形容に用いる。

がてん-しゃ【合点者】『名』じゅうぶんに理解しないで、早のみこみをする者。*咄本・醒睡笑-三「なにと風呂はたつや」と尋ね給ふ時、くだんの合点者（がてんしゃ）、『いづれのせんたうへも入りまゐらせたが、これやうにようたつせんたうはをりない』とぞ申しける」

かてん-しょ【家伝書】『名』ある家に代々伝えられて来た書物。*日葡辞書「Cadenxo（カデンショ）」 発音〈標ア〉〇 〈京ア〉

かてん-しょ クヮテンショ【花伝書】■室町中期の能楽論。世阿弥の最初の著。正称「風姿花伝」。初めの三編は応永七年（一四〇〇）に、四編以降はその後数年の間の成立とされる。「年来稽古条々」「物学条々」「問答条々」「神儀」「奥儀」「花修」「別紙口伝」の七編を収める。父観阿弥の教えを基に、自身の思索経験を織り込んだもので、能の本質、歴史、稽古、演技、演出、花などについて記す。日本の芸術論の代表の一つ。花伝。■『名』華道の伝書。各種がある。 発音〈標ア〉〇 〈京ア〉

がてん-ずく：づく【合点尽】『名』（形動）「がってんずく（合点尽）」に同じ。*仮名草子・八行整版本昨日は今日の物語「がてんづくにて、去（い）んでたもれ」*俳諧・若狐「渡世をも送りかねたる身の向後 合点づくにてのきしつれあひ」*浮世草子・傾城禁短気-三-三「十八匁に売（うる）も買入も其合点（ガテン）づく」

かてん-そう：サウ『名』イラクサ科の多年草。本州、四国、九州などの山麓の樹陰に生える。茎は暗紫色を帯び、高さ約一〇～三〇センチ㍍で叢生（そうせい）する。葉はほぼ三角形で縁は鈍い鋸歯（きょし）状、長柄をもち、基部に二個の卵形の小托葉がある。四月ごろに、上部の葉腋（ようえき）に緑色の雌花をつけ、白色の雄花を葉上に高く抜き出す。ひしばかきどおし。さんきらい。しばかきどおし。*和漢三才図会-九六「土茯苓（どぶくりゃう）さんきらい〈略〉俗云山帰来又云加天草」*日本植物名彙〈松村任三〉「カテンサウ ヒシバカキドホシ」 発音 カテンソー〈標ア〉〇

カデンツァ『名』（ツァ＝Kadenz）「カデンツァ」に同じ。

カデンツァ『名』（ツァ＝cadenza）独奏協奏曲で、楽章が終止部（コーダ）にはいる直前に独奏者の技巧を存分に誇示するために挿入される、華麗で装飾的な楽句。カデンツ。 発音〈標ア〉カ

かてん-ほう クヮデンハフ『課田法』『名』中国、西晋代の土地制度。二八〇年、武帝が占田法と共に制定。丁男（一六～六〇歳の男子）に五〇畝、丁女に二〇畝、次丁男（一三～一五歳、六一～六五歳の男子）に二五畝の田地を割り当てて租税を徴収した。課田の解釈、占田との関係については諸説がある。

かでん-みん クヮデン：【火田民】『名』火田を耕作する原始的な農民。*記念碑-堀田善衛「あの火田民（カデンミン）のような軍人や政治家や官吏たちが、人の心の中にまで踏み込んできて荒廃させ」

がてん-むし【合点虫】『名』昆虫「こめつきむし（米搗虫）」の異名。*重訂本草綱目啓蒙-三七-化生「叩頭虫〈略〉はたおりむし 京、がてんむし 同上 がってんむし 筑後」

かと『名』銅貨をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

かーと クヮ：【火斗】『名』①火を運ぶ器（うつわ）。十能。せんば。*漂荒紀事-二「舎を広くせんとして、後ロなる山の崖を穿ちて窖を造る。此窖を掘る用器四物、耒及鋤、火斗〈じょりんの代用也〉、簣なり」②炭火を器に入れて衣服などの皺（しわ）をのばす器具。ひのし。熨斗（うっと）。*和漢三才図会-三六「熨斗（のし） 熨 同、火斗〈略〉字彙云 熨 以ㇾ火申ㇾ縮、従ㇾ上按ㇾ下者又謂ニ之火斗一」

かーと【河図】『名』中国で、伏羲（ふっき）氏の世に、黄河から現われた龍馬の背上にある旋毛（つむじ）にかたどったという図。これによって天地の変化を占うことができるとし、八卦（はっけ）は、これによって作ったという。↓河図洛書。*続日本紀-天平八年一一月丙戌「河図之霊、史不ㇾ絶」記」*参天台五台山記-六「握ニ河図一而闕化」*書経-顧命「赤刀・大訓・弘璧・琬琰在ニ西序一、大玉・夷玉・天球・河図在ニ東序一」

かーと【家兎】『名』①人家で飼ううさぎ。飼いうさぎ。②ねずみ（鼠）の異名。*滑稽本・浮世床-初-上「鼠にも表徳がござへやすかネ」『表徳かはしらぬが、社君だの家兎（カト）だの種々（いろいろ）異名があるて』*重訂本草綱目啓蒙-四七-獣「鼠〈略〉社君「事物異名」、家兎 白衣」 発音〈標ア〉カ 〈京ア〉カ

かーと クヮ：【過渡】『名』①渡ること。また、渡し場。*方言-巻七「過渡謂ニ之渉済一」②新しい状態に移っていくこと。また、その過程。*思出の記〈徳富蘆花〉巻外-一「封建的日本が二十世紀の日本に移る過渡―維新前後の五十年は」*青年〈森鷗外〉一五「突然なんの著明な動機もなく、なんの過渡（クヮト）もなしに」*風俗小説論〈中村光夫〉近代リアリズムの発生-一「青春は、必然に過渡の時代です」③渡しすぎ。払いすぎ。かわたし。④漢文修辞法で上文を受けて下文を始めるのに用いる文のつがいになる語。承接。 発音〈標ア〉カ 〈京ア〉カ

かーと クヮ：【蝌蚪・科斗】『名』①「おたまじゃくし（御玉杓子）」の異名。かとう。《季・春》*薬品手引草「科斗（クヮト）かへるご 蝌斗（クヮト） 同」*霞舟先生詩集-首夏「柳楊門巷全収ㇾ絮 蝌蚪池塘欲ㇾ化ㇾ蛙」*凍港〈山口誓子〉「蝌蚪生（あ）れて畝火の溝におよぐなり」*荘子-秋水「還ニ虷蟹与ニ科斗一莫ニ吾能若一也」②中国の古体篆字（てんじ）の称。筆紙がまだ行なわれないで、竹簡に漆で文字を書いたため、粘って文字の線の最初が大きく、末が細く、その形がおたまじゃくしに似ていたところからいう。蝌蚪文字（かともんじ）。*三代実録-貞観元年四月二八日「詔曰、書称ニ科斗一懋遷之訓斯彰 簡号ニ韋編一」*随筆・胆大小心録-九〇「末の二三紙は、ていか卿の紀氏のままをうつせしといはれしに、其字のかたちは科斗（クヮ

ト）の字のごとし」＊後漢書-盧植伝「古文科斗（注）古文謂二孔子壁中書一也。形似二科斗一因以為レ名」 発音 ㊀ 方 古辞書 文明

かど の 書（しょ） 「かと（蝌蚪）②」のこと。また、その篆字（てんじ）の書物。＊爾雅翼-巻三〇・蝌蚪「孔安国以為、蝌蚪書燬已久、時人無二能知者一」

かと の 水（みず） おたまじゃくしの泳いでいる水たまりや池。《季・春》＊葛飾ヘ水原秋桜子ン「蝌蚪の水わたれば仏居給へり」＊五百句ヘ高浜虚子ン大正一三年「天日のうつりて暗し蝌蚪の水」

かど【才】《名》①才能。才覚。気のきくこと。＊書紀-仁賢即位前（図書寮本訓）「幼（わか）くして聡（さと）く穎（すぐ）れ、才（カト）敏くして識（さとり）多し」＊宇津保-祭の使「しづ心もなくおぼえければ、あるがなかにかどあるわらはして、かく聞えたてまつる」＊源氏-帚木「すこしもかどあらむ人の耳にも目にもとまる事しねんにおほかるべし」②おもむき。持ち味。＊栄花-駒競の行幸「あやしき草木を掘り植へ、かどある巌石を立て並べて」＊志濃夫廼舎歌集-福寿草「淡しかる味にかどもつ豆のしる高きいやしき品にまじはる」 語源説 (1)カド（角）の義か（和訓栞・言葉の根しらべ＝鈴江潔子・大言海）。(2)カタトガリ（片尖）の義（日本語源＝賀茂百樹）。

かど【角】《名》（「かど（廉）」「かど（才）」とも同系か）①物のとがって突き出た部分。二次元の図形や稜線にもいう。＊宇津保-祭の使「御前のまへになだらかなる石かどある岩など拾ひたてたる中より」＊観智院本名義抄「稜 ソバ カド」＊荘子抄-六「玉のかどをすりをとすやうに彫琢して」②物のすみ。隅。＊多情多恨ヘ尾崎紅葉ン後・八・三「火鉢の一角（カド）を見ると、黄金の線巻（すぢまき）の指環が脱いて遺いてある」＊春と修羅ヘ宮沢賢二ン小岩井農場「あの稜（カド）の所でいつか雪が光ってゐた」③刀剣の鎬（しのぎ）、または切先（きっさき）をいう。＊万葉-六・九八九「焼太刀の加度（カド）打ち放ち大夫（ますらを）の禮（ほ）く豊御酒（とよみき）にわれ酔（ゑ）ひにけり」＊湯原王ン＊読本-椿説弓張月-残・六・二回「かどうち放す焼刀（やきだち）の、鞆（つか）を握てたゆたふたり」④道や廊下などの曲がり目の所。曲がり角。＊虎明本狂言・二九十八「此町はむろ町なり。かどから十八間目、是であらふ」＊滑稽本・浮世風呂-前・上「角（カド）のどらかネ」＊魔風恋風ヘ小杉天外ン前・子爵の養子・八「其の美しい顔は、街角（カド）を曲るまで二回三回背後を振返った」⑤人の性格が円滑でないこと。鋭敏できつい性格。圭角（けいかく）。＊枕・二六九・よろづのことよりも情あるこそ、おほかた心よき人の、まことにかどなからぬは、男も女もありがきことなめり」＊歌謡・松の葉-一・早船「四角柱のう、四角ばしらのまたのんえいそれかど、かどのないこそ添ひよけれ」＊多情多恨ヘ尾崎紅葉ン前・一〇「葉山の妻は昂然（つん）として、愛憐の無ささうな、何処かに圭角（カド）のある」⑥事態を荒だてるような点。↓かどが立つ・かどを立てる。＊洒落本-面美知之俚-三「私が独りかぶりますれば、どこもかしこも角（カト）がなひ」⑦きちんとしたけじめや格式。↓かどを倒さぬ。⑧火打ち石。＊日葡辞書「Cadoga（カドガ） tatçu（タツ）」＊滑稽本・八笑人-初・一「あらたまると、角が立つから、やっぱり不断けんくゎをする心もちでやって見さっし」＊多情多恨ヘ尾崎紅葉ン前・一〇「葉見舞・二「いいえ、さう仰有るとものに角（カド）が立ちますが」

かど が 取れる ①世慣れて人柄が円満になる。まるくなる。円熟する。＊浄瑠璃・冥途の飛脚-上「のべに書く手のかどとれて、酒も三つ・四つ・五つ」＊こゝろヘ夏目漱石ン二四「私の神経が此家庭に入ってから多少角が取れた如く」②洗練される。泥くささがとれる。あかぬける。＊浄瑠璃・女殺油地獄-上「河与様、かどがとれぬの。小ぎくといふ名が一つ出れば、与兵衛といふ名は三つ出る程ふかいふかいと、いひ立られたふたりの中」＊談義本・当風辻談義-一・大藤内が霊芝居作者を称美せし事「角（カド）のとれぬ家暮介経、今におゐて馬鹿律義」＊浮世草子・世間妾形気-一・三「いつの比よりか、多門に見そめられて、都の水に角（カド）とれて」

かど の 雲（くも） 南西方から北東方へ流れ行く雲。夏の土用にこの雲が多いと、秋の初めに大風が吹く前兆という。

かど を 入（い）る ①元服前（半元服）の一四～五歳の頃、額の両隅（すみ）の前髪の生え際を四角く剃る。角を抜く。＊浮世草子・好色一代男-二・二「十五歳にして、其三月六日より角（カド）をも入て」＊浮世草子・男色大鑑-四・四「気をとめて見しに、此人は角（カド）を入たるよしもなく、生付の丸額（まるひたい）是ぞかし」②「かど（角）を立てる②」に同じ。＊俳諧・西鶴大矢数-第二八「大臣が大の眼に角をいれ」

かど を 倒さぬ ＝**絶やさぬ**・＝**潰**（つぶ）**さぬ**・＝**崩**（くず）**さぬ**」（器物、衣類等が、古くなってもなお形をくずさないという意から）人が窮乏してもなお昔の体面を保つ。また、旧家が依然としてその格式を持ち続ける。＊中華若木詩抄-中「天下悉く列氏に帰して、草木までもなびくやうなるが、ちっとも、かどをたをさすして居たは淵明一人ぞ」＊浮世草子・西鶴置土産-一・一「かどたをさぬ大鶴屋が屋、見た所は今も大臣なり」＊浄瑠璃・双蝶蝶曲輪日記-四「大坂に袤も名高き島の内、大宝寺町に年を経て、角（カド）を絶（タヤ）さぬ揚米屋（つきごめや）」＊滑稽本・里のをだ巻評「客が来いでも吉原じゃと、古流の角（カド）を崩さぬやうにじっと守って居る時は」

かど を 立てる ①頑固な、また、理屈っぽい態度や言い方をして、物事を荒だてる。＊曾我物語-九・和田の屋形へ行きし事「何とてか、和田殿は某に逢ひ給へば、由無き事にもかどをたててのたまふらん」＊生ヘ田山花袋ン三一「気が立って居るもんだから、お互いに小さなことに角を立てるんだ」②角立てる。怒気を含んだ目つきにいう。角を入る。＊日葡辞書「メニ cadouo（カドヲ） タツル」＊浮世草子・新色五巻書-三・三「老の眼（まなこ）に角（カド）をたて、こわい顔するがおかし」

かど を 抜く 「かど（角）を入る①」に同じ。＊浮世草子・懐硯-一・二「床（とこ）髪結（かみゆひ）さへ所のわかひ者の角（カト）ぬいて居（ゐ）るなど」

かど【門】《名》①家の周囲に巡らした、かこいの出入口。また、家の出入口。もん。＊古事記-下・歌謡「真木栄（さ）く 檜の御加度（カド）」＊伊勢物語-五「かどよりもえ入らで、童べのふみあけたる築地（ついひぢ）のくづれより通ひけり」＊十巻本和名抄-三「門 四声字苑云門ヘ加度ン所ニ以通二出入一也」②門の前。また、門に近い庭。門のあたり。門の付近。＊万葉-一七・三九七八「可度（カド）にたち 夕占（ゆふけ）問ひつつ 吾（あ）を待つと〈大伴家持ン」＊古今-秋上・二〇八「わがかどにいなおほせどりのなくなべにけさ吹く風にかりはきにけりヘよみ人しらずン」＊平中-二二「常に、この家のかどよりぞ歩きける」＊新古今-冬・六〇六「我が門の刈田のねやにふす鴫（しぎ）の床あらはなる冬の夜の月ヘ殷富門院大輔ン」③家。家屋。宅。屋敷内。＊平家-二・小教訓「積善の家に余慶あり、積悪の門に余殃とどまるとこそ承はれ」＊虎寛本狂言・二人袴「怜が御門を存じませぬに依て、御門外迄付て参りました所に」④一族。一門。＊続日本紀-天平宝字元年七月二日・宣命「国の法、已むこと得ず成りなむ。己が家家、己が門門、祖の名失はず、勤め仕へ奉れ」＊紫式部日記-寛弘五年一〇月一六日「藤原ながら、かどわかれたるは、列にも立ちさりけり」＊仮名草子・東海道名所記-三「門（カド）合（こぞ）りて繰繦（るいせつ）のはぢをうけ、生涯の難をまねきけるこそ不便なれ」⑤譜代の下人。一般に門屋または門の者といい、地方によって名子（なご）、被官、家来、家抱（けほう）などという。大部分は親方の屋敷内の小屋に住み、形式的には一家を形成しているが、親方への隷属性の強いものが多かった。門（かど）の者。＊佐久郡桜井村家改帳（信州）-延宝三年「一高弐拾八石五斗四升 吉右衛門 門 彌五郎 門 吉蔵 門 三之助 右吉右衛門屋敷内に居住仕候」⑥薩摩藩で、小農民の組合をいう。 方言 ①家の前の空地。前庭。庭。新潟県中部 418 富山県西礪波郡南谷 437 長野県南部 050 静岡県榛原郡 566 岐阜県 042 愛知県 584 三重県度会郡 610 滋賀県彦根 619 京都府竹野郡 626 大阪府泉北郡 644 奈良県 669 和歌山県 675 兵庫県赤穂郡 049 鳥取県倉吉 041 島根県那賀郡 723 岡山県 741 広島県 701 山口県 771 徳島県 809 愛媛県 827 高知県幡多郡 851 対馬 919 熊本県南関 947 鹿児島県種子島 987 ②便所。福島県会津 173 新潟県北魚沼郡 050 ③戸外。そと。石川県江沼郡河南 456 福井県 458 兵庫 647 淡路島 039 奈良県榛原郡 664 和歌山県日高郡 041 岡山県御津郡 743 徳島県 805 ④家への入口。屋敷の外。群馬県 233 ⑤他家の畑と境を接している区域内の田。高知県土佐郡土佐山 846 ⑥表の戸。但馬 039 ⑦使用人に財産を分けて一戸を構えさせたもの。長野県北安曇郡小谷 519 ⑧分家の子孫。高知県土佐郡土佐山 846 語源説 (1)カナト（金戸・金門）の略（万葉代匠記・雅言考・名言通・紙魚室雑記・和訓栞・言葉の根しらべ＝鈴江潔子）。(2)カマヘト（構戸）の義か（和句解・日本語原学＝林甕臣）。(3)カはカキ（構）の語根か。トは門の義（大言海）。(4)カト（垣所）の義（言元梯）。(5)カは場所を表わすカ（所）、トは戸の義（俚言集覧）。(6)カは接頭語。トは戸の義（東雅）。(7)カト（彼所）の義（類聚名物考）。(8)カは接頭語。トは、ト（止）の義か。または、限処の略か（滓の跡）。(9)カタムルトコロ（堅所）の義（本朝辞源＝宇田甘冥）。(10)カタトノ（固殿）の反（名語記）。(11)ホカト（外戸）の略（日本釈名）。 発音 ㊀ カゾ・カンド（和歌山県）カロ（京言葉） ㊁ 方 ㊂ 平安・鎌倉 ◉ ○ 奈良 方 古辞書 和名・色葉・名義・和玉・文明

かど 打つ 門をとじる。特に江戸時代、江戸などは、隣町との間に、必ず設けられていた門・木戸を、犯人の逃亡を防ぐ時などにとじる場合をいう。＊浮世草子・懐硯-一・三「辻番手柄を見るより心して門うたずして通しける」

かど たつ 門の扉（とびら）をしめる。門をとじる。＊万葉-一・二・三一一七「門立（かどたて）て戸も閇（さ）したるを何処（いづく）ゆか妹が入り来て夢に見えつる〈作者未詳〉」＊万葉-一・二・三一一八「門立（かどたて）て戸は閇（さ）したれど盗人のほれる穴より入りて見えけむ〈作者未詳〉」＊文明本節用集「立レ門 カドヲタツル」 古辞書 文明

かど に 立つ （特に、物乞いをするために）門口（かどぐち）に立つ。家の入口に立つ。転じて、物乞いをする。＊日葡辞書「Cadoni tatçu（カドニ タツ）、または、カドダチ スル〈訳〉門口に立つ」＊仮

名草子・犬枕「門に立つ乞食(こつじき)」＊談義本・豊年珍話―一・猫児の忠死「今日は編笠して、諷(うた)いうたひて門に立も人間世のならひなれば」

かど の 尼(あま)にも 用(よう)あり 用事もあるまいと思う人にも、時には用事を頼む必要が出てくるものである。＊諺苑「門の尼(アマ)にも用あり」〔和漢故事〕門脇の嫗(ウバ)にも用あり」

かどの 犬(いぬ) 家の門を守っている犬。＊読本・椿説弓張月―拾遺・五四回「年来(としごろ)、利勇に媚諛(こびへつら)ひ、彼が門(カド)の狗(イヌ)となりしは」

かどの 神(かみ) 家の門を守護する神。かどもりのかみ。＊古事記―上「天石戸別神、亦の名は櫛石窓神と謂ひ、亦の名は豊石窓神と謂ふ。此の神は御門之神(みかどのかみ)ぞ」

かど の 神棚(かみだな) 正月、門にまつる神棚。《季・新年》＊俳諧・誹諧初学抄―初春「門神棚(かどのかみタナ)」＊俳諧・増山の井―正月「門の神棚 在家の妻戸に棚をかまへて神を祭り夜はかはらけに灯をそなへ侍る事也」＊妻木松瀬青々〜新年「故郷は門の神棚作りけり」

かどの 春(はる) 門口(かどぐち)にただよう新春の気分。＊俳諧・鷹筑波―一「寛永や十八公の門の春〈全翁〉」＊雑俳・柳多留―一七「門(かト)の春跡からも又跡からも」

かどの 外(ほか)なる=三車(みつぐるま)=法(のり)の車 「かたく(火宅)の車」に同じ。＊梁塵秘抄―二・法文歌「かどのほかなるみつぐるま、二つは乗らむと思ほえず、大白牛車に手をかけて、直至道場訪ひ行かむ」＊光悦本謡曲・軒端梅「門の外法の車の音きけば、我も火宅を出でにけるかな」

かどの 松(まつ) 「かどまつ〔門松〕」に同じ。《季・新年》＊世諺問答―正月「問て云。『一日よりしづが家ゐに門の松とてたて侍るは、いつごろよりはじまれる事ぞや』＊俳諧・曠野―二・歳旦「月雪のためにもしたし門の松〈去来〉」

かどの 者(もの) 「かど(門)⑤」に同じ。

かどの 礼帳(れいちょう) 年賀の客に名前を記してもらうために、玄関先または店先に備えておく帳面。年始帳。

かど 広し 一族が大勢になるさま。一族が繁栄するさま。＊竹取「此の世の人は、男は女にあふ事をす。女は男にあふ事をす。その後なん、門ひろくもなり侍る。いかでかさる事なくてはおはせん」

かど 分かつ 分家させる。＊大鏡―五・道長上「さて、不比等のおとどの男子二人又御弟二人とを四家となづけて、みな門わかちたまへりけり」

かど 分かる 一族が分かれる。分家する。＊栄花―初花「新しき御子の御喜びに、氏の上達部引き連れて拝し奉り給ふ。藤氏ながら門わかれたるは列にも立ち給はず」＊大鏡―一・序「ひとつすぢにぞおはしあれど、かどわかれぬれば、人々の御こころもちゐも又、それにしたがひてことことになりぬ」

かど を 出(い)ず ①家を出る。②出家して僧や尼になる。＊夫木―三四「かどをいでばたづねてゆかん清水寺名にたがはずは住みやとまると〈源忠房〉」

かど を 売る 門口に来て、物の名を声高に呼んで売る。＊浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡―上「かどをうる声山草やちょっと祝ひましょ。うら白・ゆづり葉・ごまめで御座んせの春ながに」

かど を さす 門の扉(とびら)をしめる。錠をおろす。＊万葉―一一・二五九四「行かぬ吾(わ)を来むとか夜も門(かど)不レ閇(ささず)あはれ吾妹子が待ちつつあらむ〈作者未詳〉」＊色葉字類抄「鎖 カトサス」＊虎明本狂言・節分「いひきれ小二郎、かどさそふにかどさそふに、さそふならささひ」 古辞書 色葉・文明

かど を 広ぐ 子孫を多くもって一族を繁栄させる。＊源氏―薄雲「辱くとも、猶このかどひろげさせ給て、侍らずなりなむ後にも、数まへさせ給へ」＊源氏―幻「そこにこそは、かどはひろげ給はめなど、の給ふ」

かど を 塞(ふさ)ぐ 不義理などでその家へ行きにくくなる。敷居が高くなる。＊狂言記・昆布布施「最早方々のかどをふさげた所で、どこへ無心いはうやうもない」 古辞書 文明

かど 【廉】〔名〕(「かど(角)」と同系か)数えたてるべき箇条。条理。理由。また、目につく特徴。＊花鏡―比判之事「面白きかどを少々(すくなすくな)と見せて、見物者の心を引き驚かして」＊牧民金鑑―一・御代官心得方・寛政五年八月「都て御入用之廉多といへども、近来川々御普請之御入用に過たるは無之、何共恐入候儀」＊人情本・閑情末摘花―五・二九回「今朝、態々(わざわざ)参った旨意(カド)は」＊和英語林集成(初版)「コノ kado(カド)ニ ヨッテ トガヲ モウシツケル」＊真景累ヶ淵―三遊亭円朝・六七「何等の廉(カド)を取って左様なことを仰しゃる」＊当世書生気質〈坪内逍遙〉一「どこやら愁ひ貞(がほ)に見らるる廉(カド)もなきにはあらねど」 語源説 カド(角)の義〔和訓栞・言葉の根しらべ=鈴江潔子・大言海〕。 発音 〈標ア〉 カ 〈京ア〉⓪

かど 【鰊】〔名〕魚「にしん(鰊)」の異名。《季・春》＊四季物語―一二月「しだ、ゆづりはといへるも、ささしまめかどのうを心ぶとの御まはりの下にしかれて」＊書言字考節用集―五「鰊 カド 未詳」＊浜荻(仙台)「かど ほしたるをにしんといふ」 方言 ①にしん(鰊)。岩手県126 宮城県151 秋田県南秋田郡154 福島県石城郡小名浜028 ②さんま。三重県度会郡610 語源説 (1)蝦夷語か。東海に産するところから鰊の字を書く〔名言通・大言海〕。(2)クロハダウヲ(黒肌魚)の義〔日本語原学=林甕臣〕。 古辞書 書言

かど の 子 ⇨親見出し

かど 【川所】〔名〕 方言 ①泉。青森県南部112 ②川辺の洗い場。岩手県123 宮城県153 《かどこ》青森県津軽115 秋田県鹿角郡156

かど 〔名〕植物「こうほね(河骨)」の異名。 方言 植物。①おもだか(沢瀉)。青森県上北郡野辺地117 ②こうほね(河骨)。秋田県154 《がとう》奥州南部061 ③ししうど(猪独活)。京都府竹野郡網野626

かど 〔名〕植物「こうぞ(楮)」の異名。＊和英語林集成(再版)「Kado カド 楮」

かど 【下土】〔名〕(「かと」とも) ①下界。大地。この国土。↔上天。＊続日本紀―宝亀一一年正月乙酉「朕謁二命上玄一、君二臨下土一」＊本朝文粋―一三・勧学院仏名廻文〈慶滋保胤〉「誠雖レ楽二遊宴於下土之性一、尚恐遺二罪累於上天之眸一」＊開化本論〈吉岡徳明〉上・一「上天の下土を覆育するがごとく、君主の九重に坐してよく宇内を統御するは、即ち仁なり」＊改正増補和英語林集成「Kato カト 下土」＊詩経―邶風・日月「日居月諸、照二臨下土一」 ②片いなか。辺鄙(へんぴ)。＊漢書―劉輔伝「新従二下土一来、未レ知二朝廷体一」 ③やせた土地。

かど 【下奴】〔名〕①召使い。 ②代名詞的に用い、自分をへりくだっていう語。また、相手をののしって呼ぶ語。

かど 〔接尾〕【火度】〔名〕陶磁器などを焼く窯(かま)の温度。楽焼き六〇〇〜七九〇度、素焼き六〇〇〜八八〇度、炻器(せっき)九〇〇〜一四三五度、磁器一一八〇〜一四六〇度くらい。焼成熱度。 発音 〈標ア〉 カ

かど 〔接尾〕【華土】〔名〕国の美称。みごとな国。りっぱな国。＊続日本紀―延暦九年五月庚午「已既洗二濁俗一、更欽二清化一。志同二内民一、風仰二華土一」

かど 【家奴】〔名〕①召使いの男。下男。家僕。＊漢書―地理志「男没入為二其家奴一、女子為二婢一」 ②小作人。

かど 〔接尾〕【過度】〔名〕①(形動)普通の程度を越えていること。また、そのさま。いきすぎるさま。なみはずれ。＊庭訓往来「房内過度」＊西国立志編〈中村正直訳〉一・二三「格伯田(コブデン)の書を読事の過度(〈注〉ホドヲコス)なるを見て、これを戒めけるが＊義血侠血〈泉鏡花〉五「憐むべし過度(クッド)の馳駑(ちぶ)に疲れ果てたる馬は」＊青年〈森鷗外〉二四「過度(クッド)に緊張した神経が、どんな微細な刺戟にも異様に感応する」＊春秋左伝―襄公一四年「使二師保一之、勿レ使レ過レ度」 ②(―する)仏語。生死の海を渡って悟りの彼岸に到ること。度。＊元久法語「みなことごとく生死を過度すべし」＊無量寿経―上「過二度生死一、離レ不二解脱一」 発音 〈標ア〉 カ 〈京ア〉 カ 下学・文明・明応・天正・書言

がと 〔名〕昆虫「じむし(地虫)」の異名。＊丹波通辞「蟐(すくもむし)がと」 方言 かたつむり(蝸牛)。京都府加佐郡631

がーと グッ【画図】〔名〕絵や図をかくこと。また、その絵や図。絵画。図画。がず。＊和漢朗詠―下・王昭君「愁苦(しうこ)辛勤(しんきん)して顕顔(せうすい)し尽きぬれば 如今(いま)ぞ却って画図(ぐわと)の中(うち)に似たる白居易〉」＊中右記―元永元年九月一九日「或人云、法橋明順一日病胸、俄入滅、年八十余、是絵仏師、巧二画図一者」＊平家―一・二代后「清涼殿の画図の御障子(しゃうじ)には、昔金岡(かなをか)がかきたりし遠山のあり明の月もありとかや」＊読本・椿説弓張月―拾遺・附言「当寺におなじ震影の画図(グット)あり」＊西洋道中膝栗毛〈総生寛〉一四・上「中央に柱を用ひず内面に五彩の画図(グット)をもってこれを飾り」

がーと 〔助〕 方言 金額を表わす語に付いて、だいたいそのくらいという意を表わす。ほど。「百円がとください」福岡906 佐賀県912 長崎県927 壱岐934 鹿児島県971 《がとう》鹿児島県喜界島991

がーあきんど 【門商人】〔名〕商品を持って売り歩く人。行商人。＊浄瑠璃・鬼鹿毛無佐志鐙―三「門商人(カドアキンド)の売りに来たか」

がーあけ 【門開・門明】〔名〕 方言 本家や隣家などへ年頭の挨拶に行くこと。徳島県三好郡807 《かどわけ》静岡県周智郡気多044 高知県土佐郡土佐山846

がーあんどう 【門行燈】〔名〕家名、屋号などを書き、門口にかけて目印にしたあんどん。＊浄瑠璃・心中天の網島―下「空十五夜の月さへてひかりはくらきがどあんどうやまとや伝兵衛を一字がき」

がーい かどひ〔勾引・拐〕〔名〕(動詞「かどう(勾引)」の連用形の名詞化)かどわかすこと。誘い出すこと。また、その人。＊俳諧・新虚栗―下「芙蓉吹け胸に古今の勾(カドヒ)見む卓五」＊改正増補和英語林集成「Kadoi カドヒ 訳、誘拐」

がーい 〔形〕 方言 ①悪がしこい。すばしっこい。静岡県田方郡272 神奈川県津久井郡286 山梨県南巨摩郡奈良田510 ②犬や猫などの人になれないさま。福島県175

がーいし-いだ-す かどひ〔勾引出〕〔他サ四〕女や子供をだまして連れ出す。かどわかす。誘拐する。＊日葡辞書「Cadoi idaxi, su, aita(カドイ イダス)」

がーいし 【角石】〔名〕 方言 火打ち石。青森県113 盛岡113 富山県礪波437 信州153 愛知県北設楽郡570 愛媛県829 福岡県八女郡900 長崎県南高来郡鉄砲町926 大分県北海部郡957 鹿児島970 奄美大島古仁屋984 鹿児島県種子島987

かと-いって 〔連語〕(「そうだからといって」の意。接続詞的に用いられる)ある事柄をあげ、それから当然予想される対立的または付加的な事柄を打ち消す場合に用いる。そうかといって。＊竹沢先生と云ふ人〈長与善郎〉竹沢先生東京を去る・四「その愉快相なグ

ループの中へ不調和にわり込んで行く気にもなれず、かと云ってまさか我れ一人澄めりと云ったやうな超然たる顔つきで廊下へも出られず」

かどいて【門出】〔名〕①「かどで(門出)①」に同じ。＊平家-九・生ずきの沙汰「同十三日、すでに門(カド)いでときこえし程に」＊浮世草子・御前義経記-四・一「門出(カドイデ)の御祝義に、四季の草花を台につくらせ」＊風流仏〈幸田露伴〉二「是を出世の御門出(カドイデ)と義理で暁〈さと〉して雄々しき詞を、口に言はする心が真情か」②「かどで(門出)②」に同じ。＊日葡辞書「Cadoide〈カドイデ〉〈訳〉戦争や遠い地方に行く前に行なわれる、家の外での別れのあいさつ。予定していた日に出発できない場合や、望ましい吉日を逃さないために、前もって寺や親類や友人の家に行ってはなむけをしてもらい家に帰る。カドデ、または、カドイデョイ、または、アシイ」方言①出発。かどで。愛媛県827 宮崎県960 鹿児島県979 ②旅立つ人を招いて酒を飲ませること。高知県幡多郡鵜来島009

かどいで-だけ【門出竹】〔名〕発音カトー 古辞書 学・書言 きのこ「まんねんたけ(万年茸)」の異名。＊重訂本草綱目啓蒙-二四・菜「芝〈略〉かどいでだけ 丹波、かどでだけ 長州、〈略〉まんねんだけ 勢州」

かどいーと・るかどひ-【勾引取】〔他ラ四〕女や子供などをだまして連れ去る。かどわかす。誘拐する。＊御伽草子・秋夜長物語「さては此際忍びて謂ひかはす山徒のありと聞きしが、何様かどひ取てけりとて、陰家の周章は申すに及ばず一寺の鬱陶斜ならず」＊仮名草子・二人比丘尼-上「おさなき時、人あきびとにかどひとられ、かかるあづまのはての、しるべなき所にうられきて」

かどいれ【門入】〔名〕方言婚礼を後ですることにして実質上の結婚をすること。宮城県本吉郡大島009 群馬県勢多郡233

かどいわし【鰊鰯】〔名〕魚「にしん(鰊)」の異名。＊物類称呼-二「青魚 かど 一名 にしん〈略〉又江戸にてかどいわしと云て鰯の中の交りてあるもの也」方言 岩手県130 宮城県142 福島県193

かーとう【下等】〔名〕①下の等級。下位。＊東京新繁昌記〈服部誠一〉二・常平社「行厨〈べんとう〉の値ひ約ね三等あり〈略〉下等の如きは則ち役夫、或は貧生の喰ふ所」＊周礼-秋官・司儀「及二其擯一之各以二其介一、公於二上等一、侯伯於二中等一、子男於二下等一」②料金の最も安い船室、車両。下等室。下等列車。明治時代に用いた。＊西洋道中膝栗毛〈総生寛〉一四・下「この処より乗り合ひの賃銭は上等中等を別にして下等の振り合ひ一人前途中の下り所によりて〈略〉差別あり」＊内地雑居未来之夢〈坪内逍遙〉一「下等(カトウ)の乗合は其数夥多しと見えながら」＊露団々〈幸田露伴〉二〇「一つ船にて来りしなれども、上等と下等にて船中にては知れざりしなり」③(形動)物などの状態、性質、品質が劣っていること。＊武蔵野〈山田美妙〉中「燈火は下等の蜜蠟で作られた一里一寸の松明の小さいのだから」＊非凡なる凡人〈国木田独歩〉下「室の下等(カトウ)にして黒く暗憺なるを憂うる勿れ」＊吾輩は猫である〈夏目漱石〉四「探偵と高利貸程下等な職はないと思って居る」④(形動)教養がなく品性の劣っているさま。＊浮雲〈二葉亭四迷〉一・三「母はどうせ下等の人物ですから始終可笑しな事を言っちゃアからかひますのサ」＊坊っちゃん〈夏目漱石〉一〇「喋舌るのも只喋舌るのではない、教師のわるロを喋舌るんだから、下等だ」⑤京都の八瀬、大原で、男をいった語。＊随筆・見た京物語「八瀬大原は総じて男を下等といふ。みな総髪なり」発音カトー〈標アク〉〈京アク〉

かーとうクッタウ【火湯】〔名〕火のように熱い湯。＊百座法談-三月一日「燃鉄火湯のたへかたさをおもふにせむかたなくおそろしくて」＊今昔-六・二九「火湯涼しき水の如し、多〈おほく〉の罪人皆華の上に座す」

かーとうクッタフ【火楊】〔名〕炬燵(こたつ)のこと。

かーとうクッ:【火頭】〔名〕律令制で、百姓を徴発して使役する際設けられた職掌。一〇人ごとに火頭一人を設け、衛士の炊事の世話に当たらせる。＊令義解-賦役・役丁匠条「凡役二丁匠一、皆十人外給二一人一充二火頭一〈謂。火頭者。断丁也。執二炊爨之事一、故曰二火頭一〉」＊正倉院文書-天平一〇年・駿河国正税帳(寧楽遺文)「依二病退一衛士仕丁衛士火頭等一」＊続日本紀-天平宝字元年四月辛巳「備前、紀伊等国兵士并防人、鎮兵、衛士、火頭、仕丁、鼓吹戸人、輸車戸頭、並免二今年田租一」＊宋史-食貨志「差二官辛一充二使令一、置二火頭一具二飲膳一」

かーとうクッ:【火燈・瓦燈】〔名〕(「がとう」とも)①燈火をともす陶製の道具。方形で上がせまく下が広がっている。＊文明本節用集「瓦燈 グットウ」＊日葡辞書「Guató〈グットウ〉〈訳〉土製の器の一種で、中に火のついた燈火があって、しかも外からは見えないようになっているもの」＊浮世草子・昼夜用心記-一・二「瓦洞(グットウ)に燈火(ともしび)細く気を通しける」＊歌舞妓年代記-二・享保一五年・晏火は火鉢のしょく敵行燈は火燈(クットウ)の寄親」②「かとうぐち(火燈口)①」の略。＊歌舞伎・韓人漢文手管始(唐人殺し)-四「見附の鏡戸くわとう赤壁残らず毀(こぼ)ち、込入たる体にて」③「かとうびたい(火燈額)」の略。＊浮世草子・好色一代女-四・三「額際を火塔(クットウ)に取て置墨こく、きどく頭巾より目斗あらはし」④「かとうまど(火燈窓)」の略。古辞書 文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・書言

かーとう：タウ【可撓】〔名〕たわめることが可能であること。ふつう単独では用いないで、「可撓性」のように熟して用いる。

かーとう【仮痘】〔名〕種痘を受けていた者がかかる天然痘。症状は軽く、発疹も不規則で少なく、膿疱を作らないこともある。

かーとう【河東】■〔名〕①川の東方。＊本朝無題詩-一〇・山寺即寺〈藤原忠通〉「河東有寺訪二其源一」祖考 幽栖昔相門」②「かとうぶし(河東節)」の略。＊談義本・当世下手談義-五・都路無字大夫江の嶋参詣の事「近世の河東は中にも上品の至り浄瑠璃和して都の優美に酌ず」＊滑稽本・浮世風呂-四・下「江戸は半太夫、河東(カトウ)此ふたつにとどまるよ」■(一)江戸で隅田川の東側、本所、深川を、京都で鴨川の東側、祇園をさす。＊園太暦-貞和三年八月八日「新日吉社造営料足事、宛二課洛中河東酒屋一可レ終二其功一之由」(二)とくに、江戸深川の遊郭をさしていう。＊洒落本・文選臥坐-一目「河東〈カトウ〉フカガハ〉の艶詞」(三)河東節の創始者、十寸見河東〈ますみかとう〉。また、初代以後、代々の家元の芸名。＊随筆・独寝-上・六〇「ちかくいはば、河東が弟子に成て、一衣帯・斑女がねやのあふぎにてもかたる時は」(四)中国の黄河東岸地方の通称。主に山西省西南部をさす。発音カトー〈標アク〉

かーとうクッタウ【果糖】〔名〕代表的な単糖類。果汁や蜂蜜に含まれ、また、蔗糖の一成分でもある。左旋糖。発音カトー〈標アク〉〈京アク〉

かーとう【河頭】〔名〕河のほとり。河辺。＊日葡辞書「Catô〈カトウ〉〈訳〉河岸」

かとう の 祓(はらえ)「かわのぞみ(河臨)の祓」に同じ。＊貞信公記-抄、承平元年二月三日「大原野奉幣事、依レ有二所疑一占、不吉也、仍河頭解除」

かーとうクッ:【科頭】〔名〕かぶり物をつけていない頭。すあたま。＊北海詩鈔-夏日浴後作「科頭擁二膝葛衣軽」初月已含二涼簟一明」＊王維-与盧員外象過崔処士興宗林亭詩「科頭箕踞長松下、白眼看二他世上人一」

かーとう【夏冬】〔名〕夏と冬。＊続日本紀-天平二年三月辛亥「望請選二性識聡恵芸業優長者十人一以下五人以上専精二学問一、以加二善誘一。仍賜二夏冬服并食新一」＊古事談-二・忠実告急速召時衣装不可論夏冬事于師光事「仰云、有二急速召一時、衣装不一可レ論二夏冬一也」

かーとうクッタフ【掛搭・掛褡】〔名〕「かしゃく(掛錫)」に同じ。

かーとうクッ:【科籐】〔名〕植物「とう(籐)」の異名。＊航米日録-七「竹は節薄ふして女竹の如し、又科籐あり、多く笠籬に用ゆ」＊東西洋考-彭亨・物産「科籐、蔓抽被二地無二枝葉一、有二皮裹一其外一如二竹皮一剝之則落、長数丈、不レ値二剪伐一」

かーとうクッタフ【靴沓】〔名〕くつ。＊江談抄-一「安嘉門額者。髪逆爾生之童乃着二靴沓一之躰也」

かーとう【歌頭】〔名〕踏歌(とうか)の音頭(おんど)を取ること。また、その人。＊源氏-竹河「その年かへり、男踏歌せられけり。〈略〉その中にも、勝れたるを選らせ給ひて、この四位の侍従、右のかとうなり」＊和訓栞-「かとう 歌頭也。源氏に見ゆ。蹈歌にある事也。今の音頭の如し」

かーとうクッ:【裏頭】〔名〕僧侶が袈裟(けさ)で頭から顔を包み、目だけ出した装い。かしらづつみ。＊小右記-長和元年五月二四日「裏頭法師五六人出立云、ここは檀那院ぞ、下馬所ぞ」＊園太暦-貞和四年四月六日「裏頭大衆数百人為見訪」＊北山殿行幸記-応永一五年三月一四日「千人の大しゅれいのくはとうとかやにて、かひをふきつれて」＊顕密威儀便覧-下「裏頭、裏頭用二浅碧絹一製レ之、複縫長八尺、名曰二縹頭一」発音カトー〈標アク〉古辞書 学・文明・黒本・易林

裏頭〈法然上人絵伝〉

かとう【加藤】姓氏の一つ。発音カトー〈標アク〉

かとう-うまき【加藤美樹】江戸中期の国学者。歌人。姓、河津。号は静廼舎(しずのや)。名は宇万伎とも書く。幕府大番の与力。賀茂真淵に学び県(あがた)門四天王の一人とされる。門弟に上田秋成など。主著「雨夜物語だみ詞」「土佐日記解」「静舎歌集」など。享保六〜安永六年(一七二一〜七七)

かとう-えなお【加藤枝直】江戸中期の歌人、国学者。千蔭(ちかげ)の父。姓、橘。名は為直。号は芳宜園(はぎぞの)など。伊勢国(三重県)の人。江戸南町奉行の与力となり、のち出家。賀茂真淵に師事。古風を重んじた華麗な歌風で江戸派の祖と称される。家集「東歌」六巻。元禄五〜天明五年(一六九二〜一七八五)

かとう-かげまさ【加藤景正】鎌倉前期の陶芸家。長尾瀬戸焼(陶器)の中興の祖。通称四郎左衛門。号は春慶。略称、藤四郎。名は景政とも書く。貞応二年(一二二三)僧道元に従って宋に渡り製陶法を修得。帰国後、瀬戸に窯(かま)を開いたといわれる。その遺作を「古瀬戸」、春慶焼と称する。以後、藤四郎の名は代々継承された。生没年未詳。

かとう-ぎょうたい【加藤暁台】ぎょうたい(暁台)

かとう-きよまさ【加藤清正】安土桃山・江戸初期の武将。幼名虎之助。尾張国(愛知県)の人。賤ヶ岳七本槍の一人。豊臣秀吉に仕えて戦功多く、熊本城主となる。文禄・慶長の役には先がけとなり、蔚山(うるさん)籠城などで勇名を高める。関ヶ原の戦いでは徳川方につき肥後一国を受領したが、豊臣家の安泰をも図った。永禄五〜慶長一六年(一五六二〜一六一一)

かとう-しげる【加藤繁】東洋史学者。文学博士。島根県に生まれる。東京帝国大学支那史学科選科卒。慶応義塾大学教授、東京帝国大学教授を歴任。わが国における中国経済史学の開拓者といわれる。

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com